法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-22

研究展望(平成26年)

中司, 由起子 / 表, きよし / 宮本, 圭造 / 高橋, 悠介 / 横山, 太郎 / 石井, 倫子 / 伊海, 孝充 / ワトソン, マイケル / OMOTE, Kiyoshi / MIYAMOTO, Keizo / TAKAHASHI, Yūsuke / YOKOYAMA, Taro / ISHII, Tomoko / NAKATSUKA, Yukiko / IKAI, Takamitsu / WATSON, Michael

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)
42

(開始ページ / Start Page)
105

(終了ページ / End Page)
141

(発行年 / Year)
2018-03-31

研究展望（平成二十六年）

平成二十六年に発表された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に掲載された論文を概観する。前年分と同様、単行本（表きよし）、資料研究・能楽論研究（宮本圭造）、能楽史研究（高橋悠介、横山太郎）、作品研究（石井倫子、中司由起子）、狂言研究（伊海孝充）、外国語による能楽研究（マイケル・ワトソン）の七つに分けて分担執筆している。重要な論考を見落とすなどの遺漏も少なからずあろうと思う。ご寛恕を乞う。

【単行本】

『能、ドラマが立ち現れるとき』（土屋恵一郎著。四六判264頁。1月。KADOKAWA。一八〇〇円）

角川選書の一冊。十番の能（井筒・融・清経・朝長・姨捨・鵺・松風・大原御幸・定家・砧）を取り上げ、それぞれの作品の特色を考察する。橋の会での活動などを通して能楽と深く関わってきた著者だけに、研究者の説にしっかり目配りしながらも、独自の視点から作品世界に迫っている。能の作品のとらえ方の多様さを感じさせる書である。

『現代芸術としての能』（原田香織著。四六判256頁。2月。世界思想社。二一〇〇円）

著者が能楽に感じる魅力や、日頃から能楽に抱いている関心を中心に、能楽の現状を考察する。各章の内容は、能楽堂という空間、面・装束・道具類を観ること、役者の動きを見ること、音曲を聴くこと、現代能楽の視点と展望となっており、特に最後の章では女性能楽師や英語能・手話狂言・バリアフリー能など、まさに現代の能楽のさまざまな取り組みを取り上げている。能楽の基本的な事柄もしっかり取り入れながら、著者の能楽への視点が盛り込まれ、一般の入門書とはひと味違った書となっている。

『南部藩の能楽』（青柳有利子著。A4判212頁。2月。早稲田大学出版部。三〇〇〇円）

江戸時代の南部藩の能楽への取り組みを研究した書。博士論文の抜粋を早稲田大学モノグラフ104として出版した。南部藩の能楽については千葉常樹『南部藩能楽史』などにより早くから紹介されているが、盛岡だけでなく江戸での取り組み

を含めて総合的に考察する点に特色がある。本文篇と資料篇に分かれており、本文篇では能楽導入期、江戸時代前期（天和から元禄）、江戸時代中期（宝永から天明）、江戸時代後期（寛政から嘉永）に区切りながら各時期の状況を細かく考察していく。それぞれの時期に活動した役者についても詳しく言及されている。資料篇は南部藩江戸日記『御在府留』と南部藩国日記『雑書』の能楽関連記事、文化から嘉永の演能記録集成である『御能日記』から上演された曲名とシテが紹介されている。盛岡に何度も足を運んで調査を進めた成果が十分に表れている。

『粟谷家所蔵能面選』（粟谷能夫監修。A4判50頁。3月。粟谷能夫発行。二八〇〇円）

監修者が第三十四回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞をきっかけに家蔵の能面の調査を思い立ち、その成果をまとめたのが本書である。百を超える所蔵面から五十面を選び、面裏をも含めた写真と、調査チームの大谷節子・宮本圭造・見市泰男による解説が収録されている。いずれもが現在も舞台で活躍している面であり、これだけの数を揃えることがいかに大変だったかが想像できる。監修者の父である粟谷新太郎の能面へのこだわりを紹介する文章や、粟谷家の能面には鳥取池田家旧蔵のものが含まれていることから、宮本圭造の「喜多流と鳥取池田家旧蔵面」という考察も掲載されている。この考察では、鳥取池田家の面は喜多家のものを本面とすることが多いため、喜多家の能面の状況を知る上でも大きな手掛かりとなることなどが指摘されている。

『禅竹能楽論の世界』（高橋悠介著。A5判472頁。3月。慶應義塾大学出版会。六六〇〇円）

実践に基づく論が中心の世阿弥伝書に比べて難解であるため、敬遠されることの多い金春禅竹の伝書に真正面から取り組んだ研究書。「はじめに」で禅竹研究の流れを確認し、「Ⅰ猿楽の芸能神としての翁と荒神」では禅竹の能楽論や思想を考える上での鍵となる「荒神」について、『明宿集』などを材料に考察する。「Ⅱ円満井座の伝承と禅竹の信仰の諸相」では「御影・舎利・鬼面」という円満井座の三宝を手掛かりに、円満井座の伝承や禅竹の思想を分析している。「Ⅲ六輪一露という表象」では禅竹が伝書で様々に説いている六輪一露説を、神道説や華厳学、禅などとの関わりから把握していく。神道や仏教に関する豊かな知識を背景に論が展開されており、禅竹の思想の解明に大きな前進をもたらした。なお、著者は本書の成果などにより第三十六回観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞している。

『永青文庫所蔵資料調査報告書　第二集―能面と能道具―』（熊本県立美術館編集・発行。A4判172頁。3月。非売品）

平成二十三年度から二十五年度にかけて実施された永青文庫所蔵資料調査事業の成果を報告したもの。熊本県立美術館

に寄託されている能面・能道具について、田邉三郎助・門脇幸恵・日高薫の指導のもとに調査が行われた。この報告書の内容は総論・図版編・資料編に分けられており、総論では田邉三郎助「細川家の能面について」と門脇幸恵「細川家の能道具」により所蔵資料の全体像や特徴が紹介されている。図版編ではそれぞれの資料の写真を掲載し、資料編では具体的なデータを紹介する。能面・狂言面はもちろんのこと、楽器・冠帽類、装束類の小物、仮髪、作り道具、蔵道具、作り物から面箪笥に至るまで、能楽に熱心に取り組んだ細川家の資料だけに、実に多くのものが保存されている様子がわかる。

『黒川能面装束図譜』（黒川能面装束図譜製作実行委員会編。A4判172頁。3月。黒川能保存会。非売品）

山形県の黒川地域で伝承されてきた黒川能の装束や面を写真で紹介する。装束が百十点、面が百二点で、伝承の過程で着々とこれらを揃えていった関係者の努力と苦労が窺える。演能の様子や小学生の演技、虫干しの光景なども写真で紹介されており、日常の取り組みの様子も感じられる。増田正造・馬場あき子・工藤幸治・大塚亮治の特別寄稿も収録されている。上座・下座の役者や神社関係者が実行委員となって製作された立派な写真集で、非売品だが黒川能保存会に一定額以上の寄付を行った人に進呈されるようだ。

『能を考える』（山折哲雄著。四六判192頁。3月。中央公論新社。一六〇〇円）

月刊誌『観世』に平成二十四年から翌年にかけて連載された記事を中心に一書としたもの。世阿弥やその伝書、〈翁〉を始めとする様々な演目、能面から観世寿夫に至るまで様々な事柄を取り上げて論じている。仏教的な視点から論じている場合もあるが、難しい言い方ではなくわかりやすく説明されている。「能は生体を死体に近づけることによって究極の美的超越を志向するもの」といった興味深い指摘が随所に見られ、奥が深い内容になっている。

『鴻山文庫蔵能楽資料解題　下』（法政大学能楽研究所編。A5判620頁。3月。野上記念法政大学能楽研究所。六〇〇〇円）

上冊（謡本）、中冊（伝書・注釈書）に続く下冊がようやく刊行された。上冊刊行から二十四年、中冊刊行からでも十六年もの時間を要した経緯は山中玲子所長による「あとがき」に触れられているが、この下冊に目を通せばいかに大変な作業だったかご理解いただけるだろう。下冊は「付、狂言、史料、その他、メモ・活字本・レコード等」について解説を加えており、鴻山文庫がどれだけ多様な資料を蔵しているかがわかるとともに、詳細な解説を付したので資料の性格も理解しやすくなっている。歴代の所員の地道な仕事の積み重ねにより刊行にたどり着いたもので、この作業を通して新たな研究に発展した成果も存在する。下冊の刊行によって鴻山文庫受贈の条件をようやく満たしたことになり、これによって鴻山文

庫の資料はますます活用しやすくなったので、今後の能楽研究に大いに寄与するはずである。

『松江城下の町人と能楽』（小林准士著。A5判87頁。3月。島根大学法文学部山陰研究センター。九二六円）

江戸後期の松江藩における舞囃子などを記録した瀧川伝右衛門の『御囃子日記』（島根県立図書館蔵）を紹介する。松江藩では松江城三の丸御殿や家老邸での正月の松囃子などを能に習熟した町人が担当する仕組みがあった。出演する町人たちは事前に稽古を積み重ね、その様子を町奉行が見分している。一方で稽古後には会食で親睦を図り、結束を強めていった様子も窺える。町人の役者を取りまとめたのが御用商人の瀧川家で、名誉な役ながら経済的負担も大きく、苦労しながら仕組みを支えていった。本書はコンパクトながら松江藩独特の能への取り組みを教えてくれる興味深い書である。なお、この『御囃子日記』全体の翻刻は能楽研究所の能楽資料叢書4として平成二十九年三月に刊行されている。

『国文学研究資料館叢書6　狂言絵　彩色やまと絵』（国文学研究資料館編。A4判139頁。6月。勉誠出版。一三〇〇〇円）

国文学研究資料館所蔵となった『狂言絵』をフルカラー図版で掲載する。全六十図を、偶数頁には影印、奇数頁には図の裏面（曲名が記される）の写真と解説、『古狂言後素帖』の図柄が共通する絵の写真などを掲載する。解題執筆は小林健二で、『狂言絵』の書誌や特徴、他の狂言古図との関係などが詳しく考察されている。能楽研究所蔵『能狂言尽くし』との関係にも言及があり、画題・図柄・曲名の共通性が指摘されている。狂言古図の研究は近年どんどん進展しており、そこにまた新たな材料を提供することになった。

『能界情報おもてうら』（堀上謙著。新書判246頁。6月。能楽書林。一〇〇〇円）

能楽評論家として活躍した著者の評論・随想集。内容は三部に分かれており、「Ⅰ能界情報おもてうら」は『能楽ジャーナル』などに執筆した文章を収録、「Ⅱ能界展望・ブックレビュー」は二〇〇八年から二〇一三年までの能界の動向と能楽関連著書の紹介、「Ⅲ能の観客と動向」は能楽の現状と将来について論じた文章がまとめられている。能楽の将来について早くから危機感を抱き、将来へ向けての取り組みを訴えてきた著者の厳しい視点と、能楽に対する深い愛情を感じることができる。

『観世元章の世界』（松岡心平編。A5判576頁。6月。檜書店。九〇〇〇円）

十五世観世大夫で徳川家重・家治の能指南役を勤めた観世元章に関する論考などを集成したもの。元章は学問的関心が高く、謡曲詞章改訂や新演出の採用など大がかりな能楽改革に着手して『明和改正謡本』を刊行した。観世文庫に所蔵さ

れている元章関係資料の調査・研究の成果をもとに、「論考篇」「事典篇」「資料篇」に分けて元章の活動を紹介している。「論考篇」には中堅・若手の研究者を中心とする十四名の論考が収められており、それぞれについてはこの「研究展望」の能楽史研究や作品研究などの項で取り上げたのでそちらを参照していただきたい。「事典篇」の「元章小事典」は元章に関連するキーワード百一項目を解説、元章と関わりがあった人物が多く取り上げられ、元章の人脈を考える手掛かりとなる。「資料篇」には「元章年譜」「元章関係書目」「元章関係主要研究論文目録」が収められている。元章に関する様々な情報を提供してくれる本書の刊行により、元章研究のさらなる進展が期待される。

『日本人の身体』（安田登著。新書判256頁。9月。筑摩書房。八二〇円）

ちくま新書の一冊。ワキ方能楽師である著者が、日本人にとって身体とは何かを論じている。「身」と「からだ」、曖昧な身体、溢れ出る身体、ため息と内臓という章立てで、様々な角度から身体を見つめていく。随所に能の話が登場するものの、能を論じた本ではない。しかし、能にとっても重要な身体にあらためて注目するという点で示唆に富む本である。漢字の字源や言葉の語源への注目が多い点にも特色が感じられる。

『能のうた―能楽師が読み解く遊楽の物語―』（鈴木啓吾著。B6判400頁。9月。新典社。三二〇〇円）

観世流シテ方能楽師による能の作品紹介。副題にある「遊楽」は世阿弥が伝書で用いる語だが、まさに能の世界に遊んで楽しもうという狙いを持っている。「神・男・女・狂・鬼」の五章に分けられ、それぞれ五から十三の作品、全部で四十曲が取り上げられる。各曲とも、曲中に引用されている、あるいはその曲を創作するにあたり重要な要素となっている和歌や漢詩をまず紹介し、それからあらすじ、解説と続いていく。解説はさらにテーマ分けされているが、能楽師の手に成るものなのに、演技や演出ではなく文学や歴史の面からの考察となっている点に特徴が窺える。

『観阿弥生誕六八〇年世阿弥生誕六五〇年記念　世阿弥の世界』（京都観世会編。A5判146頁。10月。京都観世会。一五〇〇円）

能楽研究者を中心とする三十一名が寄稿した世阿弥についての文章を収録する。世阿弥の経歴や世阿弥伝書に関するもの、世阿弥作品に関するもの、世阿弥時代の芸態に関するもの、世阿弥時代の狂言に関するものに分けられている。それぞれは二から三ページ程度の短いものではあるが、研究者が世阿弥について抱いている疑問や注目している点などが示されており、今後の世阿弥研究の進展に期待を感じさせられる内容となっている。

『**川崎九淵著作集**』（上）（下）（岡田万里子編。B5版82頁（上）・90頁（下）。11月。ぶんがく社。各冊一二九六円）

葛野流大鼓方の名人として知られる川崎九淵に関する諸資料を、花もよ叢書として刊行したもの。九淵が様々な雑誌等に寄稿した文章をテーマ別に収録する。上冊は芸談やエッセー、下冊は地拍子研究など。川崎勝子編『おもかげ』『続・おもかげ』、武智鉄二の九淵評など、関連資料も数多く転載されており、九淵の人となりを伝える貴重な資料集と言える。

『**大鼓方川崎九淵素描**』（西澤建義著。B5版78頁。11月。ぶんがく社。一二九六円）

川崎九淵の伝記。同人誌『文芸復興』に平成二十三年十二月～二十五年七月に四回にわたって連載された「人間国宝九淵素描」を大幅に修正し、花もよ叢書として再録・刊行したもの。

『**風姿花伝**』（夏川賀央訳。四六判168頁。12月。致知出版社。一四〇〇円）

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズの一冊。いつか読んでみようと思いつつもチャンスがない、読み始めてみたが途中で投げ出してしまったという人向けの本だけに、わかりやすい現代語訳となっている。注釈や解説がないのが特徴で、細かな事まで理解しようとすれば物足りないかもしれないが、あえて現代語訳だけにすることで、とにかくひととおり目を通す気持ちになれるよう配慮されている。

『**横道萬里雄の能楽講義ノート【囃子編】**』（横道萬里雄の能楽講義ノート出版委員会編。A5判260頁。12月。檜書店　三八〇〇円）

前年に刊行された【謡編】に続くもので、昭和五十八年に東京芸術大学で横道萬里雄が行った講義の後半十一回分を収めている。謡編の復習から始まって、楽器の構造と演奏法、打楽器の掛け声や手組、舞や登場の囃子など、囃子に関する様々な事柄を詳細に説明している。横道流の分類や用語を駆使して明晰に説いていくので大変わかりやすく、かなり専門的な事柄も出て来るのだが、「あとがき」にあるように「なんだかわかったような気になったのに思い返すとわからないことだらけ」という部分もあるが、付属のCDに具体例が盛り込まれているので、実際に音を確認することで理解できるようになっている。能楽愛好者でも囃子の細かなことは難しくてわからないという人も多いが、そうした人にも囃子について勉強してみようと思わせる魅力を持っている。（表）

論文

【資料研究】

まずは隗より始めよ、で『能楽研究』に載った二編の論文

から。表章「『触流し御能組』題記と注記一覧」（『能楽研究』38。3月）は、平成二十二年に急逝された著者の遺稿。享保～文久の間の江戸城における能番組集成である『触流し御能組』から、各演能の場所と趣旨を記した題記と番組の末尾に記された注記を全て翻刻したもので、平成二十年の時点でほぼ仕上がっていた原稿を、表きよしがあらためてチェックした上で掲載する。特筆すべきは、天保年間以降の番組に見える詳細な注記の存在で、当日の演能がどのような手順で行われたか、舞台上での演能の様子などがきわめて具体的に記されており、能楽史研究のみならず、演出史研究にも大いに有用である。今後の活用が期待される。

伊海孝充「玉屋謡本の研究（一）」（同）は、江戸初期の観世流板行謡本として重要な存在でありながら、光悦謡本や元和卯月本と比べて研究が立ち遅れていた玉屋謡本についての、初めての体系的な研究である。（一）では、古活字玉屋本と整版玉屋本の諸伝本を網羅し、その書誌情報を明確にした上で、古活字玉屋本・整版玉屋本間の本文異同、整版玉屋本の諸本の先後関係について考察する。末尾に「玉屋本所収曲目一覧表」を付す。

六月に檜書店から刊行の『観世元章の世界』にも、謡本関連の論文が二本載った。高橋悠介「観世元章手沢・石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本の周辺」は、観世文庫保管の石畳艶出模様の紺表紙一番綴謡本一二四冊についての詳細な論考である。同謡本には江戸期歴代の観世大夫の書入れがあるが、中でも注目されるのが観世元章による書入れで、その内容は『爐雪集』と重なるものが多く、明和改正謡本にいたる詞章の改訂過程や、元章の世阿弥理解を知る上で貴重な手がかりが得られるという。また、歴代の観世大夫による書入れから、本謡本が観世家の蔵書の中にどう位置付けられていたか、という点についても論が及んでおり、享保期における「清親と幕府との間で行われた改訂の実態」を示す資料として有用であること、本謡本が後代の観世家において一種のバイブルとして重視されていたことなど、多くの論点を提示する。観世家伝来のその他の謡本資料にも目配りが行き届いており、観世家謡本の総合的研究を思わせる、重厚な論文となっている。

中尾薫「田安宗武の改訂案書付」は、観世文庫に所蔵される〈翁〉詞章に関する考証書付が田安宗武の筆跡になること、その考証結果が明和改正謡本に反映されており、同謡本への田安宗武の関与が裏付けられることを論じる。論考の後半は、同じく宗武筆と見られる『二曲三体人形図』の考証書付についての検討。舞楽の知識を応用して能の古型の復元を試行する宗武の姿勢が窺われるという。

『観世元章の世界』には、右の二本以外にも、観世文庫蔵の元章関係資料を扱った論文が多く掲載されており、それぞれ【能楽史研究】【作品研究】【狂言研究】の各項で取り上げるが、【資料研究】に分類すべき論考として、恵阪悟「明和改正研究への視点」についても取り上げたい。同稿は、観世文庫の資料から元章に関する二点の資料を紹介し、その内容

について考察したもの。最初の一点は「神歌」の免状で、この資料に基づき、〈翁〉の素謡の名称として「神歌」の名を考案したのは元章であり、その背景に京都謡方統制の意図があるものと解する。もう一点の資料は、座衆が病気欠勤を繰り返し、公儀勤めに支障を来す旨を伝える書付で、その執筆時期を宝暦十三年〜明和四年と推定し、筆者については、明和改正謡本に反発した座衆が田安家での演能をボイコットしたことを問題視した田安家の家中であろう、と考証している。文中に「上様」とあるのを、田安宗武のことと判断しての推測であるが、この「上様」は「上総介」と読まれるべきであり、続く「□□正」も「主水正」と読むのが正しいように思われる。すなわち、明和四年の『武鑑』に「御小姓頭取衆」として見える菅沼上総介・大岡主水正がこれに該当すると思しい。明和期の元章は江戸城奥能の御用をしばしば病気を理由に欠勤していたが、右の書付に「奥詰」とあるのも、田安邸ではなく、江戸城の奥詰を指すと考えられよう。つまり、ここから読み取れるのは、江戸城奥詰を欠勤する観世座の座衆に対するクレームであり、その筆者は江戸城の関係者と見るべきであって、観世座衆の明和改正謡本に対する反発を読み解くのは、いささか深読みに過ぎるのではなかろうか。

『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』8号（6月）には、味方健「「野口勘蔵旧蔵本」概要」、大山範子「「平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本」・〔板外謡目録〕」が載った。味方稿は、大倉流小鼓方の野口勘蔵家に伝わった能楽関係資料（同センター蔵）の解題・目録。資料は総計百二十点で、手付の類が多いのは勿論のことながら、謡本・伝書・史料など多岐にわたっており、〈堪海〉〈愛宕空也〉〈草薙〉など、現在は廃曲・稀曲となっている付がまとまって見える点が特に注目される。大山稿は、やはり同センター蔵の同名資料の書誌解題。解題によれば、伊藤正義文庫の『平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本」の離れと考えられ、味方健が入手された後、同センターに寄贈された由。これによって、同謡本の欠が補われ、四百番本以降は一部を除き、ほぼ揃ったことになる。

この他、近世の能楽史に関する資料紹介として、青柳有利子・入口敦志・江口文恵・木村涼・近藤弘子・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・竹本幹夫「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿」（『演劇研究』37。3月）、喜多真王「翻刻『舞曲寿福抄』後藤得三本（五・最終回）」（『国立能楽堂調査報告』8。3月）もあった。前者は『演劇映像学２００８』『演劇映像学２０１０』に掲載の同名稿に続くもので、今号には天和二・三年の二年分の翻刻を収載する。からくり人形による能〈東方朔〉の作り物献上の記事、規式能・謡初についての詳細な記事、金剛座幸藤太郎の二之丸衆取り立てを伝える記事などが目を引く。後者はこれまで四回にわたって『国立能楽堂調査報告』に掲載されてきた喜多古能伝書の翻刻で、今号が最終回となる。喜多流の根本伝書と言うべき重要資料であり、同書が容易に披見できるようになったことは大変喜ばしい。江戸後期の能の実態や環境を具体的に示す興味深い記

事が少なくない。

近代能楽史に関する資料紹介は、初代梅若実資料研究会のメンバーによる「初代梅若実筆『芸事上数々其他秘書当座控幷略見出シノ事』解題および見出し索引、人名・曲名等索引」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』25。3月）の一本のみ。同誌22～24号掲載の翻刻とセットになるもので、本号には解題と索引が載る。三浦裕子執筆の解題によれば、梅若実が二人の実子に対して芸事上の様々な心覚えを伝えるために書かれたものの由で、打付書外題には「慶応元丑年ヨリ明治四拾未歳ニ至」とあるが、明治四十年末を中心とする比較的短期間にまとめられた可能性が高いという。三浦裕子には、能楽の映像記録の資料性を問題とする「映像記録のなかの能・狂言」（『藝能史研究』206。7月）もあり、能狂言の映像化の歴史を通観するとともに、啓蒙のために制作された能狂言の映像四点を取り上げ、その歴史上の役割や問題点などについて考察する。付録として、各映像の収録場所・年時・演者名などの客観的データを可能な限り掲載しており、これも有用。

最後に、雑誌『観世』の見返しに連載中の「観世文庫の文書」にも、多くの貴重な資料が的確な解題とともに紹介された。紹介された資料は以下の通り（カッコ内は解題執筆者）。「道成寺型附」（中司由起子）、「万治三年安休追善能扣」（落合博志）、「福王神五郎宛門弟書状」（小林健二）、観世三十郎元長筆謡本「阿漕」（天野文雄）、淡紺表紙黄題箋二番綴謡本「道成寺・鷺」（鵜澤瑞希）、墨蹟「萬年松在祝融峯」（長田あかね）、「大和国猿楽関係図」（中尾薫）、列帖装準半紙本「遊行柳」（高橋悠介）、「上杉景勝書状」（小川剛生）、慶長末期刊無表紙一番綴色替り光悦謡本「三輪」（横山太郎）、「松前藩「松竹」小謡文句につき書留」（宮本圭造）、孝和署名中本謡本「影山」（伊海孝充）。（宮本）

【能楽論研究】

貞治三年生年説に従えば、本年は世阿弥生誕六五〇年の記念の年にあたる。その影響かどうかは定かでないが、世阿弥の能楽論に関する研究が例年に比べて多かったように思われる。まず、『銕仙』633（2月）の「研究十二月往来」に「世阿弥生誕六五〇年記念企画」の一環として、重田みち「世阿弥の藝論研究の現在と将来」が載った。世阿弥の能楽論のこれまでの研究動向を踏まえた上で、今後の様々な課題を明らかにしたもので、世阿弥の多様な教養を踏まえた能楽論の内容理解の必要性とともに、数次にわたって書き換えがなされた能楽論の正確な文脈の読解能力が何より求められることを指摘する。その実際の試みというべき論考が重田「学ぶ世阿弥、考える世阿弥」（『観世』81巻8号。8月）であり、足利義満から義持への時代状況の変化が世阿弥の能楽論の改訂を促したこと、義持時代の東福寺の学問環境が、世阿弥の能楽論に多大な影響を及ぼした可能性などを指摘する。その具体例として世阿弥の能楽論への朱子学の投影を見るなど、新見が少

なくない。

『鍈仙』には他にも二本の世阿弥能楽論関係の論考が載った。岩崎雅彦「「数万人の心」と「万人の心」」（『同』636。5月）、竹本幹夫「『申楽談儀』三題―田楽のことなど」（『同』640。10月）がそれで、岩崎稿は『風姿花伝』第三問答条々に見える「数万人」に類似の用例が、『今昔物語集』や『直談因縁集』などにも見えることを指摘し、その「数万人」という表現を「数万人の心」と熟して用いる点が、世阿弥独自のものではないかとの見解を提示する。一方、竹本稿は、『申楽談儀』の「田楽の風体」に関する記事に見える「ちやく〳〵として」、観阿弥の条に見える「ゆらりきき」についての考察。「ちやく〳〵として」は、従来、語義不明とされていたが、『中堂呪師作法』所引『法隆寺金堂修正会呪師作法』の「左右ノ足ニテ・チヤクチヤクトシテ」という記事を踏まえ、両足をそろえて体を横に振るようにして跳躍する所作か、とする。また、「ゆらりきき」についても、『平家物語』などの用例を踏まえて、素早く動く演技を想定する。ともに首肯すべき見解であろう。前者の跳躍の動作については、田楽躍の論舞（路舞）の中にも同様の所作が見え、この動作が田楽能の中に用いられていた可能性もあるのではなかろうか。

原田香織「世阿弥伝書における「曲道息地」」（『文学論藻』88。2月）は、世阿弥の能楽論に見える「息」についての論。複数の世阿弥能楽論に見える「息」に関する記述を概観し、禅竹の能楽論への継承を見る。

従来の国文学的アプローチではなく、思想史からのアプローチによる、若い世代の研究者の論考も多くあった。玉村恭「〈秘すれば花〉考」（『上越教育大学研究紀要』33。3月）は、世阿弥の「秘すれば花」の言説を文脈に沿って丁寧に読み込み、『老子』の言葉をも引いて、観客と演者との関係を勝者と敗者の関係に読み替えることで、「花ぞとも知らぬが、為手の花なり」についての新たな見方を提示し、世阿弥が「概念の及ばない領域」の感動を至上としていたとし、さらにそこから、現行学習指導要領において「感じ取ったことを言葉で表すなどの活動」が重視されていることにつき問題を提起する。式町眞紀子「『風姿花伝第一』「年来稽古条々」」（『法政大学スポーツ健康学研究』8。3月）は、アスリートのトレーニング理論から筆を起こし、世阿弥の能楽伝書へと展開する論。『風姿花伝』の年来稽古条々に見える習道過程を、発達心理学の知見と対比しつつ紹介する。

右の二本が何れも世阿弥の能楽論と現代との繋がりを強く意識した論考であるのに対し、上野太祐「世阿弥にとって「初心不可忘」の教えとは何であったか」（『一橋社会科学』6。4月）、同「世阿弥の思想形成をめぐる一考察」（『日本思想史学』46。9月）は、ともに思想史学からのアプローチに拠りながらも、近年の能楽研究の動向を踏まえ、当時の文化環境や時代性にも十分に目配りをしたアプローチを採る。前者の論では、世阿弥の伝書における「初心」の語義がどう変化したかを辿り、「老後」でさえも「初心」と捉える逆説

的発想がどのようにして生まれたのかを、禅との関わり、世阿弥の中での亡父観阿弥の芸境の理論化という視点から考察。後者の論では、足利義持時代の増阿弥の台頭が、世阿弥の「音曲」重視をもたらし、その理論化の過程で『毛詩』が果たした役割に注目する。なお、右の二編の論文は、その他の世阿弥能楽論関係の論考とともに、二〇一七年一月刊の単行本『花伝う花』（晃洋書房）に収録された。（宮本）

【能楽史研究】

能楽史研究は、室町時代から江戸時代中期にかけてを高橋、主に江戸時代後半から近代にかけてを横山が担当する。

室町時代の能楽史についての論文は少なく、以下三本がそれぞれ元重・元雅・禅竹についての論文。天野文雄「応永三十三年の「観世三郎」の勧進猿楽をめぐって」（『おもて（大槻能楽堂会報）』121、能苑逍遥五九）は、かつて江口文恵が紹介した東寺百合文書『東寺廿一口供僧方評定引付』応永三十三年（一四二六）五月十三日条にみえる「観世三郎」の勧進猿楽をめぐる考察。元重が近い時期の記録上でどう呼ばれているかを検討しつつ、天野も江口と同じく「観世三郎」が元重である蓋然性が高いと結論づける。その際、『醍醐寺新要録』所載『隆源僧正日記』応永三十一年四月十八日条にみえる清滝宮祭礼楽頭職就任の記事で、出家後の世阿弥が「観世三郎」と表記されるのを問題とし、楽頭職は俗名で任命して俗名で呼ぶ慣習があったためかという表章の試解を支持する。また、元重が翌年にも稲荷辺で青蓮院義円の後援のもと勧進猿楽を催している事実と合わせ、これも義円の後援であった可能性を推測、世阿弥に比して多くの勧進猿楽を興行している元重の評価に注意をうながす。同「元雅はなぜ観世家の歴代に数えられていないのか」（『おもて（大槻能楽堂会報）』122、能苑逍遥六〇）は、歴代に元雅を数えない観世家の伝承について歴史を振り返り、享禄三年（一五三〇）頃編の『四座之役者目録』「観世大夫代々次第」では、世阿弥の後が音阿弥になっており、このような元雅を観世家の歴代に数えない説は近世にも継承されたことを確認する。そして、吉田東伍による『世阿弥十六部集』刊行以降、元雅を三代とする説が登場し、表章や天野が、観世大夫号の性格や、元重が世阿弥と同じく三郎という名を名乗っていることを根拠に観世家の伝承を見直すまで、元雅を三代とするのが学会の定説であったという。また、松岡心平「宗教的人間としての禅竹―『稲荷山参籠記』から」（『国立能楽堂』371、7月）は、禅竹の『稲荷山参籠記』を読み解きつつ、禅竹の宗教性の中核に歓喜天信仰があったことの意義を問う。

近世能楽史については、浄瑠璃における能の影響や受容の問題を論じたものと、観世元章をめぐる論文がまとまって出ている。前者は、前年12月に神戸女子大学で行われた第21回能楽フォーラム「能から浄瑠璃へ―正本・操りの問題を中心に―」をもとにした『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』8（6月）の特集で、能における三人称叙述などについて

も問題提起する山路興造の講演「語り物の舞台化―その変遷をめぐって」他、以下二本の論文と研究討議のコメント、大谷節子による総括を掲載する。槇記代美「寛永期浄瑠璃における能の受容に関する再検討―『はらた』・『きよしけ』・『小袖そか』」は、寛永期浄瑠璃「はらた」・「きよしけ」・「小袖そか」を取り上げ、能との影響関係や能操りの介在について再検討する。〈はらた〉については能〈鉢木〉に取材した「鉢木物」とでもいうべき文芸が介在した可能性を論じ、能操りを媒介して能〈清重〉の趣向を摂取したとされてきた〈きよしけ〉の清重・義盛の太刀交換の場面については、謡曲そのものからの摂取も不可能ではないとする。〈小袖そか〉の寛永二十年頃刊本の相舞の挿絵については、寛永製版『舞の本』の〈小袖曽我〉を粉本とするとされてきた事に疑問を呈し、源氏絵の紅葉賀の場面など他の絵画やかぶき踊の芸態の影響を受けた可能性もあるとする。また、田草川みずき「宇治加賀掾段物集における謡曲本文の浄瑠璃化について―理論と実践、かざし詞など」は、宇治加賀掾段物集『紫竹集』所収「八曲」と、『八九杖』で選出され『九曲巻』に収められた「九曲」について、謡曲本文を浄瑠璃化したものとして論じている。浄瑠璃の「ヲクリ」を謡の「打切」の心に例え、そこで位を改めるという宇治加賀掾の理論が実際に「八曲」「九曲」中の記譜に確認できることや、宇治加賀掾正本「扇の芝」が能〈鉢木〉のかざし詞をいち早く取り入れていることなどを指摘する。

同紀要には、河田千代乃・阪口弘之・宮本圭造三名による研究討議コメントも掲載されており、このうち能楽史研究側からのコメントが宮本圭造「「能操り」覚書」で、「能操り」が「浄瑠璃操り」に先行したという通説に疑問を呈するもの。えびすかきが演じていた能の人形戯が一新されて本格的な能の興行を人形で演じる「能操り」が登場するのは元和年間のことで、それは「浄瑠璃操り」の盛行に刺激を受けたものと位置付ける。また浄瑠璃操りの座においては、江戸では演目の切に祝言として能操りが演じられたが、上方や名古屋では幕開きに能操りを演じるのが慣例であったこと、また操り座での能の曲目が「高砂」に限定されていく江戸と異なり、上方系の座では複数の能の曲目が演じられていることなど、江戸と上方の違いにも言及する。

次に、観世元章周辺とその時代に関する研究は、『観世元章の世界』（檜書店、6月）の刊行により大きく進んだと言える。これは、松岡心平を代表とする観世文庫の調査成果の一端であり、同書から能楽史に関わるものとして以下五本を紹介する。

まず、元章の時代に顕著な観世大夫家と大徳寺の関係を歴史的に検討した論文に、江口文恵「観世大夫家と大徳寺―大徳寺文書に見る戦国期の観世大夫家の動向―」と、長田あかね「観世元章と大徳寺派僧の交流―萬輝宗旭を中心に―」がある。江口論文は、大徳寺文書・真珠庵文書をもとに、京都北小路（今の今出川通り）大宮の大徳寺領にあった観世大夫家

の屋敷が、天正六年（一五七八）に宗節と鬼若丸（後の身愛）により大徳寺に寄進されており、この時点で同寺が観世大夫家の菩提寺であったことなどを指摘する。また、八世観世元尚の位牌や命日の茶湯料に言及する大徳寺僧の文書や、愛知県豊橋市龍拈寺の元尚の墓碑情報から、元尚の命日が通説より一日早い天正五年一月二十九日であることにも言及する。長田論文は、元章に法名を授けた萬輝宗旭を中心に、元章と大徳寺派僧の関係を考察し、大徳寺塔頭間の金銭トラブルで提訴された萬輝が元章に幕府への口添えを依頼する程、親密であった両者の関係や、萬輝が住持を務めていた東海寺（江戸品川にある大徳寺末寺で江戸触頭）の高僧達と元章の交流を紹介し、幕府や上級武士階級との結びつきが強い東海寺に出入りすることは、江戸幕府における観世家の地位をより強固にするものでもあったとする。

元章の演者としての生涯を同時代の動向とも合わせて考証する論考が、宮本圭造「観世元章とその時代」である。まず青年期については、寛保三年（一七四三）十一月頃から翌年七月頃まで、元章が父清親との確執により江戸を出奔し、大伯母・服部智清尼の世話のもと京都に引き籠もっていた可能性を指摘。続いて家督相続後、寛延勧進能の成功を経て、江戸城の表での〈翁〉付脇能や〈石橋〉の独占や、奥での将軍家と近臣による能の稽古の指南を通して、公儀筆頭位の大夫としての活動を展開する一方、田安宗武の意向もあって謡曲改訂作業に取り組んだ宝暦期。そして、江戸城表での催しに出勤する一方で、奥では弟の織部清尚に代役を勤めさせることも多かった明和期の活動を描き出している。また、津軽弘前藩・若狭小浜藩など清親・元章時代に地方で観世流を採用する藩が増えた実態、浅井織之丞章盈・藤林左仲・片山九郎右衛門など上方や西国における元章の門弟の活動や元章との交流などにも言及する。元章の生涯を時代状況の中で詳しく描き出す重厚な論文であり、元章没後に明和改正謡本を廃止に追い込んだ黒幕が、能数寄でもあった田沼意次であった可能性なども推測している。

また、元章が催した寛延勧進能を興行収入の面から分析したのが、青柳有利子「寛延勧進能小考」である。桟敷の値段が元禄期の半額であり、一万石以上という広い階層の大名に祝儀の下賜が義務づけられたが、大名の祝儀は安価な干鯛が多く、金銭的負担の重点が武家から町人へ移行する転換期と推測されること、桟敷・祝儀・札金の合計が四千五百六十両以上で、江戸時代の他の勧進能と比較しても最高水準の収入があった勧進能と思われることなどを指摘する。

鵜澤瑞希「観世大夫の子ども時代」は、観世清親や元章の子供時代の稽古や、若年の大夫嗣子に許される〈鷺〉をはじめとした演能の実態、上演曲目の傾向などを分析したもの。清親や元章の時代における大夫嗣子と嗣子以外の子の活動実態や、大夫家の子どもは幼い頃からシテの専門家として活動し、子方を殆どつとめていないことなどにも言及する。同論文では、清親筆『あつめ書』の中、十三・四歳以降の逸話の文意

がはっきりしないと書いているが、清親が「東北の様成しづか成事をしつかに仕候時」、西村三郎兵衛に叱られた経験は、当時は不満だったが、今思えばもっともな指導であった、と読める。少年時には不相応な物まねの演技を問題にしていると解釈すれば、『あつめ書』が続いて、雛の時だけ美しい梟にならないよう、幼少時は舞歌二曲の風ばかりを嗜むべきであるという『遊楽習道風見』を引用するのも理解しやすい。

なお、『観世元章の世界』所載論文以外で元章の経歴に言及したものとして、同じく宮本圭造による「明和九年の観世元章上京をめぐる新資料」（『銕仙』638、7月）がある。金春宗家の文書の中にみえる、元章が幕府に提出した御暇願の控えを通して、明和九年（一七七二）に元章が京都・南都・大坂等をめぐった旅は観世家の歴史に関わる寺社や墓所をめぐる目的が主であった実態を明らかにしている。大徳寺真珠庵の観阿弥・世阿弥の墓についても、この上京が契機になって作られた可能性を推測している。

その他、能面に関して、以下二本がある。高桑いづみ「ちと年寄りしくある女面再考―待つ女と待てぬ女―」（『銕仙』637、6月）は、世阿弥が女能に用いたことが『申楽談儀』第二十二条にみえる、愛知〈越智〉打の「ちと年寄りしくある面」について、〈井筒〉や〈砧〉の構想に影響を与えた可能性を推測するもの。また、宮本圭造「『仮面譜』の成立」（『能楽研究』38、7月）は、喜多古能による面打ちの名譜『仮面譜』（刊本は寛政九年（一七九七）序刊）の成立過程や資料性を明らかにする。『仮面譜』は、『面之書』（寛文十一年（一六七一）成立。伝本は国立国会図書館蔵『四座面鏡』他）・出目洞雲庸隆編『大野出目家伝書』（明和七年（一七七〇）成立）・『面打秘伝書』（安永六年（一七七七）出目元休満真奥書。伝本は早稲田大学演劇博物館蔵本のみ）の三著に依拠して編纂したもので、一部、「財蓮」「愛若」など古能が実際に見た能面の情報が反映されている部分もあるとする。特に『面之書』諸本の中でも東京大学史料編纂所蔵『仮面覚書』（横井時冬所蔵本の転写本）の独自異文と『仮面譜』の関連が深いこと等から、同本が古能の参照した本の転写本系である可能性も推測する。また、金春安住の『花舞拾得集』巻五（金春宗家蔵）所載の「面之伝書」を『仮面譜』の稿本的資料として指摘し、『仮面譜』は深尾隆紀（喜多流シテ方。出目洞雲庸隆弟子の面打）の依頼により、古能が寛政九年に湯治先の熱海でまとめたものと推測する。能面研究における『仮面譜』の有効性と限界を考える重要論考となっている。（以上、高橋）

ここからは近世後期から近代にかけての時期を対象とする論考を紹介する。いわゆる「能楽史」というくくりに収まりきらない様々な研究が混在するため、便宜上の小見出しをつけて四つに区分して紹介する。

■能楽史

まずいわゆる能楽史研究。近世後期から近代にかけての庶民の能楽享受を扱った論文が三本。米田真理「近世後期における大垣の町衆と謡曲――谷九太夫と「京観世」」（『朝日大

学一般教育紀要』39。2月）は、岐阜県大垣の有力な町衆である谷九太夫家の史料、及び大垣市立図書館蔵「山下家文書」に含まれる謡曲関連資料に基づいて、近世後期のこの地域の謡文化の様相を解明する試み。この地域で明治末まで「京観世」の謡がおこなわれ、谷九太夫が岩井家門人の沢家の門人であったこと、また観世流の家元制度の発展の過程で岩井家と沢家の間に争議があったことなどが示される。岩井と沢の争議は習事の取り次ぎをめぐるものだ。この資料の検討を通じて、著者は近世後期観世流の家元制度における中間教授層のシステム成立の様相を明らかにしている。能楽の家元制度の成立過程を理解するうえで、貴重な知見といえるだろう。

佐藤和道「ラジオ放送と能楽――地方における能楽享受への影響を中心に」（『能と狂言』12。7月）は、近代メディアと能楽の関係について研究を続ける著者の力作。著者は『朝日新聞』東京版の大正十四年から昭和二十年までのラジオ欄を網羅的に調査し、能楽のラジオ放送の全貌を明らかにした（なおこの調査データは「大正・昭和初期の能楽ラジオ放送一覧」と題して『古典遺産』六三号に掲載されている）。当時のラジオ享受の実態や番組の構成を示す資料から能楽放送の概略を示し、レコードに比して即時性と広域性という特徴を持つラジオ特有の試み（実演の中継、稽古のための番組、素人参加の番組など）があったことを明らかにしている。著者はさらにラジオ放送が能楽に与えた影響を考察し、地域格差を縮小し家元の「正しい」謡への標準化をすすめる役割を果たしたと論じる。

最後に庶民ではなく、近代における華族と能楽との関わりを論じたものとして、青柳有利子「近代における一橋徳川家と能楽――茨城県立歴史館蔵『日記』をめぐって」（『芸能史研究』204。1月）。著者は、徳川御三卿の一橋家の家扶が当主の行動を記録した資料である『日記』（茨城県立歴史館一橋家文書）を調査し、明治八年から大正十二年に至る能楽関係記事を全て抽出して年表を提示した。以上を通じて、当時の一橋家では能は上演されなかったものの宴席に能役者を召すことがあったことや、二人の女性が観能と謡を趣味としていたこと、流派は江戸時代から引き続き宝生流であり宝生九郎や松本金太郎を後援していたことなどが明らかになった。

■能楽堂

はじめに日本建築学会で発表された論考を三本。辻槙一郎「近代における能楽堂の成立過程について」と奥冨俊幸「宝生会館能楽堂計画図の発見とその意義」は、両者が参加した学会発表の梗概（『学術講演梗概集２０１４（建築歴史・意匠）』。9月）。辻によれば、この分野の指標となった奥冨『近代国家と能楽堂』においても能楽堂内部空間のデザインや設備の変遷過程の具体的な検証は未だ十分ではないという。そのうえで本稿はいくつかの近代能楽堂の見所の空間配置を検討し、正面・脇正面・中正面の序列が成立する以前には、近代能楽堂の見所は多様な構成を持っていたことを指摘する。

宝生会館能楽堂(昭和三年〜二〇年)は、奥冨前掲書において入れ子式の現代能楽堂の原点と位置づけられた能楽堂である。設計者の大江新太郎の孫である建築家大江新のもとでこの能楽堂の計画図面が見つかったが、これは実施設計図とは大きく異なるものであった。奥冨論文はこの新出資料と実施設計図を比較検討することを通じて、大江新太郎の初期の構想がどのように変化して実際の設計に至ったのか、そのプロセスを論じるものである。当初計画は、権現造の拝殿を模した和風屋根、ギリシャの円形劇場のように円弧状の座席を半円形に配した左右対称の観客席など、驚くような内容を持つものであったことが明らかにされている。先の辻論文も含め、この分野の研究の進展とともに、私たちが自明視している現在の能楽堂建築のスタイルがその起源において様々な異なる方向へ向かう可能性を含んでいたことが浮かび上がっているといえるだろう。

秦明日香、河内浩志「梅若能楽学院の構成原理について」(『日本建築学会中国支部研究報告集』37。3月)は、設計者大江宏が残した言説や図面(『建築作法』『現代日本建築家全集十二巻　渡辺鎮太郎・大江宏』)から、この能楽堂がどのような思想に基づいて設計されたかを論じる。先述した大江新太郎の子である大江宏は四つの能楽堂作品を残したが、梅若能楽学院はその最初のものだ。著者らは、大江が舞台各部の詳細な寸法の構成を演能の所作寸法にしたがって再検討したことを指摘し、彼が身体的体験に即した「間」の原理によって能楽堂の空間を構想したと論じる。また、のちに設計した国立能楽堂と比較しつつ梅若能楽学院の図面を分析し、エントランスから客席まで観客の動線と視線誘導の設計が、能の観賞における視線変化の体験を象徴しているという解釈を示した。

王冬蘭「大連にあった幻の能舞台——一九四五年までの現地における能楽活動の場所」(『芸能史研究』205。4月)は、中嶋謙昌らの植民地能楽史の先行研究をふまえて、大連の能の上演空間の実態を探求する。一九〇八年の宝生流の敷舞台、一九一四年の喜多流の敷舞台、一九二二年の大連能楽堂、それが産霊教会(神道系の宗教団体)の敷地に移転した一九三五年の大連能楽殿の四つ舞台について、どこに位置したか、どのような空間であったか、どのような人物がどのように利用していたのかを「タウンマップ大連」『満鮮謡曲界』『満州謡曲界』『満州梅若』『満州芸術壇の人々』などの資料を通じて明らかにする。著者はこの後も日本統治下の植民地能楽をめぐる論考を出し続けている。今回はあえて踏み込まなかったというナショナリズムの問題に、能楽研究として今後どのように取り組んでいけるのかも注目したい。

手塚(大西)亮太郎の孫にあたる手塚稔子が所蔵していた能楽関係資料のなかから湊川能楽堂関連資料群が発見された。大山範子「湊川能楽堂略史(一)設立期前後の神戸」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』8。6月)は、この資料群の調査・研究の成果である。大正元年から昭和八年までの

同能楽堂のあゆみを当時の神戸能楽界の状況とともに明らかにする二部構成の論文の第一部にあたる。創立者の手塚（大西）亮太郎の人物、創立の背景となった神戸能楽界の活況、大西の雑記帳『大正八年記事』や新聞報道からわかる落成前後の動向や舞台の様子、当初の「大西能楽堂」から「湊川能楽堂」への名称変更（大正十三年）の事情などが明らかにされる。また六日間にわたる能楽堂落成披露（大正元年十一月）の番組も付す。近年、近代関西能楽界の研究が進展しているが、本論文によって神戸の状況がかなりわかるようになった意義は大きい。

服部滋樹「フュージョンする空間～公共空間の多様化――社交場としての能楽堂の再生」は、雑誌『建築と社会』（95巻１１０３号。２月）の特集「融合（フュージョン）する空間――新たなる試み」の総論として書かれたエッセイ。空間・インテリアデザイナーである著者は、大阪の山本能楽堂の改修に携わった。そのプランは、もともとフレキシブルな生活空間として使われていた楽屋部分を収蔵庫とライブラリーの機能を持つ空間にするというものだ。著者はこの経験を振り返ることを通じて、能楽堂という空間の特性や、それが人々が出会って新たなものを生みだすクリエイティブな社交の場となる可能性について論じている。

■社会制度

世に「先生」と呼ばれる職業がある。高い職業威信を持つとみなされるが必ずしもその働き方の実態が明らかではないこれらの職業を扱ったのが『日本労働研究雑誌』（六四五号）の特集「「先生」の働き方」。ここに寄稿されたのが西尾久美子「能楽の先生」である。花街の人材育成を経営学的視点で分析する仕事で知られる西尾は、近年能楽に対象をひろげ、観世流シテ方の大槻文蔵へのフィールドワークをおこなっている。この論考はその研究成果の最初の一つであり、著者はその後も継続して論文を発表している。今回は、能楽の世界に生きる者にとっては自明でありながら客観的に記述・分析される機会の少ない能楽師の育成とキャリア形成をまとめたうえで、シテ方にとって長期間にわたって技能を教える「先生」であることが、一門の演能活動と密接に結びついて機能していることを論じている。

高島知佐子「能楽の家元組織とその制度にみる伝統芸能の継承メカニズム」（『文化経済学』11巻2号。9月）もまた、内部の者には自明ながら客観的に記述される機会の少ない能楽の社会制度を扱ったもの。家元制度については島崎稔、西山松之助らの先行研究がある。著者はそれらをふまえつつ、主に関西地域の七人の能楽関係者にインタビューをおこなって、現状における家元組織の構造、家元の役割、世襲・非世襲の違い、近年の変化などの情報を更新している。また著者は結論部において、経済構造の現状分析をもとに「能楽師の多忙」という課題について考察し、能楽師同士、家同士が協調しつつ能楽市場を拡大する仕組みが必要であることを示唆している。この点について、さらに積極的な提言的考察が続

くことを期待したい。

■服飾、意匠

能面を収める面袋は古くから染織品としての価値を認められ、能面の伝来や素性を知る手がかりとしても重要である。しかし現在、博物館等の能面を保管する機関では、その重要性が理解されないままうち捨てられている例もある由。こうした問題意識に基づき、面袋の体系的な把握を試みたのが杉山未菜子、花田美穂、門脇幸恵「面袋に見る能面の伝来」（『国立能楽堂調査研究』8。3月）である。著者らは永青文庫（細川家）、大倉集古館（因州藩池田家）、東雲神社（久松松平家）等々、十二のコレクションの伝来面袋を検討し、それぞれの裂地と題箋の特徴を整理した。さらに今回は特に加賀藩前田家旧蔵面面袋の墨書を詳しく検討し、面袋を通じて面の写しの経緯や「御細工者」の技術伝承の様子などを知る可能性を示してみせた。

服飾史における謡曲の影響を論じたのが遠藤貴子、綿抜豊昭「小袖雛形本にみる謡曲意匠――「かきつばた」模様を中心に」（『図書館情報メディア研究』11巻2号。3月）。江戸時代の小袖雛形本（小袖の模様を縮小した図を集めた絵本）一〇五種を用い、寛文から寛政年間（一六六六～一八〇〇年）までの雛形図九二六五図を検討して謡曲意匠の定量分析を試みた。そこから「杜若」の意匠がもっともポピュラーであったこと、そしてそれが当時の謡曲享受や『伊勢物語』享受のあり方と関係していることを示す。（以上、横山）

【作品研究】

本年に発表された作品研究を石井・中司で分担して展望する。分担の基準はさほど厳密ではないが、『能と狂言』『鋲仙』を石井が、『観世』『観世元章の世界』を中司が担当し、それぞれまとめて言及している。

能楽学会二〇一三年大会では世阿弥生誕六五〇年を記念して世阿弥の『四季祝言』「夏」、『五音』「敷島」の復曲実演ならびにシンポジウムが催された。『能と狂言』12（7月）特集「世阿弥をめぐる和歌・連歌の世界」にその報告が掲載されているので以下に紹介する。落合博志「『四季祝言』「夏」と『五音』「敷島」について」は詞章面からの解説で、『四季祝言』「夏」には義詮の和歌が用いられており、将軍義満の御前での演奏を念頭に置いて作っていること、『五音』「敷島」の背景の二点が述べられている。後者に関しては、和歌の道を讃えるとともに和歌を重んずる帝王を賛美する「敷島」が内容的にも詞章の点でも勅撰集の序と重なることから、足利将軍家による勅撰集を機に作られた曲の可能性を指摘。「敷島」の成立を新しい勅撰集の撰集が将軍家周辺で企画されていたとおぼしき応永十四～十五年頃と推測する。高桑いづみ「《四季祝言》《敷島》の謡復元」は謡復元の経緯を節付の点から解説したもの。実際にこの謡を謡った立場からの観世清河寿（現・清和）「『四季祝言』「夏」と『五音』「敷島」の復曲実演を振り返って」と併せて、この復元作業の難しさを具体

的に伝えるものである。

引き続き大会シンポジウムの報告が四本。島津忠夫「世阿弥能作と和歌―〈融〉を中心に―」は世阿弥の能作と和歌との関係を〈融〉を中心に①主題歌、②引用の古歌、③中世歌語の三つから考察した論考。①「君まさで煙絶えにし塩釜の浦淋しくも見えわたるかな」（『古今和歌集』恋一、紀貫之）が主題歌となっている ②世阿弥が古歌を意識した歌語を用いている ③中世和歌に用例がみえる歌語が用いられている一方、連歌的な枕詞の自由な掛け方も行われている とそれぞれ具体例を挙げつつ示し、〈融〉の名所教えにおいては古歌による歌枕「音羽山」「逢坂山」・中世和歌になって用例がみられる「歌の中山」「藤の森」・歌枕ではない名所の「清閑寺」「今熊野」と三タイプの地名が取り混ぜ連ねられていると述べる。詞章に引用される歌語や歌枕は全て同じ位相にあるわけではなく、細かく目配りをする必要があることを改めて強く感じる。渡部泰明「和歌の本意―『俊頼髄脳』をめぐって―」は『俊頼髄脳』「歌題と読み方」の分析を通じて和歌の「本意」に迫る。それぞれの句は複数の景物と述語としての用言（動詞）からなり、よくある和歌的な情景を描きつつも何かしら違和感を抱かせる要素を組み込むことで新たなイメージが喚起されていること、前の句と後の句との間にある言葉の繋がりによって新たな言葉やイメージが呼び込まれ、次の語が引き寄せられる仕掛けが施されていることを明らかにし、俊頼が本質的に実践的なものである「本意」を和歌的世界の中でのふるまい（「演技」）として記述していたと説く。本稿は直接能について言及しているわけではないが、俊頼の演技的な発想は世阿弥の能作法とも通底する部分が多く、非常に示唆的である。三宅晶子「動き出すことば」は能の中に引用される和歌が独自の世界を提示し作品世界を飛躍的に拡大させる例として〈融〉〈鵜〉を挙げ、本意に添って引用された和歌の存在を別方向への動きに利用することで曖昧さ・不確実さを実現し、解釈の幅を生じさせる世阿弥の作詞法と和歌的表現法の近さを指摘する。また、〈檜垣〉〈忠度〉〈井筒〉などを例に、このような作詞法によって個別の作品にどのような解釈の揺れ幅が持たされているかを示した上で、詞章の意味を限定しない世阿弥の作詞法は、時代を超えて変化し続ける「住することなき」能を作り出していると述べる。松岡心平「詩的トポスの思考―和歌の美学・方法と世阿弥の能―」は、世阿弥がどれほど詩的トポス（和歌や漢詩の世界で形成されてきた〈雅び〉の共同記憶）に通暁し、それが彼の能の演技・物まねの対象の選択などさまざまな局面に影響を及ぼしているかを論じたもの。〈雅び〉な古典的情緒世界を作り上げる名所教えが「遠見」という世阿弥独特の舞台上の演技方法を含み込むものであることに言及し、世阿弥は詩的トポスに通暁することによって上層階級に共有される〈雅び〉の世界へ参入すると同時に、場所とその記憶を尊ぶ場所的思考が「場所の演劇」としての複式夢幻能に結実したと論ずる。

和歌と能との関係ではこれらの他にも、池田英悟「〈頼政〉

に見る老境の世界　その二―歌ことば「埋れ木」の語誌をめぐって―」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』25。3月）がある。歌ことば「埋れ木」について、(1)恋(2)我が身の不遇(3)老いた身の上、隠退・出家と次第に表現範囲・表現機能が多様化し、それが古注や室町期の連歌寄合にも反映されていることを確認。〈頼政〉の主題歌である「埋れ木の」詠は「頼政自身の生涯の不遇」を詠んだものという従来の解釈に疑義を呈する。三宅晶子「〈砧〉に用いられる「水かけ草」」（『鍎仙』641。11月）は〈砧〉第六段の「水かけ草」をめぐる考察。『袖中抄』以来「水の陰の草」として理解されていたこの語が室町時代には「天の河に生え、七夕の二人の恋の涙の露が結ぶ草」と認識されていたこと、世阿弥と同時代の『看聞日記』紙背にも天の川の水陰草を念頭に置いた連歌が存在することを明らかにし、世阿弥はこのような当時の和歌的理解を踏まえて水陰草は七夕の二人のことだとの飛躍的発想をしていると述べる。三宅晶子「類型化以前の霊験能―〈田村〉を中心に―」（『能と狂言』12。7月）は「創生期の能の魅力―夢と現の間―」（『観世』80-9）の延長にある論で、世阿弥から禅竹へと続く霊験能が神仏や鬼、幽霊をどのように登場させ霊験や奇特を舞台化しているのか考察したもの。〈布留〉〈逆鉾〉〈松浦〉では夢中という枠組を利用して大胆に過去の物語が描き出され、過去と現在を繋ぐ持ち物を用いた演技が個性的な見せ場構成を可能にしていること、世阿弥の複式夢幻能は夢中であることを明示し、神能は現実世界において異常現象が起こるようになっていることを確認する。一方、〈田村〉〈笠卒都婆〉は類型表現を用いて現実か夢か曖昧な中に大胆な絵空事の世界を展開させているとし、この二曲の共通性から元雅作の可能性を示唆する。

能における女性の問題を扱った論考を二本。高木信「小宰相と小野小町との絆、あるいは〈引用〉のポリティクス―網目のなかの『平家物語』、謡曲、御伽草子、古注釈―」（『物語研究』14。3月）は『平家物語』の〈小宰相説話〉で引用される小野小町落魄説話を起点に、小宰相と小野小町との相同性を論じたもの。〈小宰相説話〉に頻出する「心強し」の語に着目し、小宰相も小町も結局は男性中心主義による犠牲者であり、〈引用〉によって男性的共同体が小町を「色好み」な「遊女」として囲い込もうとする一方、消極的にではあるが女性達が小町を肯定的に受け止める土壌が作られているとする。その上で、小町や小町歌によってつながる〈通盛〉〈清経〉〈卒都婆小町〉〈通小町〉においても「身勝手な男たち」と「沈黙する女性」という図式があてはまり、女性たちの沈黙が逆に男性の身勝手さを浮き彫りにすると述べる。〈清経〉で小町歌が引用されることの意味、〈通小町〉に内在する「男性によって救済される女性」の図式など興味深い指摘がある。松岡心平「女人の穢れを許容する時宗と能」（『鍎仙』642。12月）は女人の不浄、穢れを許容する時宗との関わりから〈柏崎〉に言及する。一三〇〇年前後の善光寺阿弥陀如来への参仕をめぐる時衆と律僧との競合の中で『善光寺縁起』他にみえる不浄

や汚濁を許容する自らの立場を表明した阿弥陀如来の御詠歌が詠み出されたとし、世阿弥自筆本〈柏崎〉で女物狂の善光寺内陣入りの押し問答が詳細に書かれていることには女人の内陣突入を記念する意味があると説く。

個別の作品研究に移る。天野文雄「自然居士の「喝食面」と「年齢設定」」（『おもて』119。1月）は喝食面の銀杏型の額髪は長禄・寛正頃の喝食の新風俗に由来するとし、〈自然居士〉のシテもこれ以前は直面で演じられていたと推測。『天狗草紙』に描かれている自然居士は成人であるが、観阿弥時代の禅院では既に喝食は少年という状況になっており、それを踏まえて演劇的な効果も計算に入れつつ観阿弥は自然居士を少年僧に設定したと述べる。同じく天野文雄「《井筒》三題」（『おもて』120。4月）は「①在原寺が廃寺ではないことの補足」として〈玉葛〉の道行にみえる「石上寺」が在原寺であることを指摘。「②里女の昔物語が「高安通い」→「筒井筒」の順である理由」は、「クリ」「サシ」「クセ」が一貫して無名の里女による在原寺の本願業平についての物語で、里女は僧に請われて業平についての故事を思いつくままに語っている設定であり、「懐旧」「恋慕」という本曲の主題と「序ノ舞」との繋がりを考えた結果であると論ずる。「③終曲部の文句は「亡婦魄霊」か「亡夫魄霊」か」では、終曲部「地」の「しぼめる花の色なうて匂ひ」以降が有常女のセリフではなく叙事文であることから、「亡婦」をあてるべきと説く。

中村健史「『弱法師』と阿那律説話―世阿弥本『弱法師』の一典拠をめぐって―」（『国語と国文学』91-1。1月）は、世阿弥自筆臨模本〈弱法師〉にみえる「古人の中にも眼廃ひて、三明六通山河大地を、見たりし人もあるぞかし」の典拠についての論。「古人」が釈迦十大弟子のうち天眼第一の阿那律であることを指摘し、阿那律説話が引かれ「六通」「山河大地」など〈弱法師〉と共通する語が確認される『夢中問答集』を元雅が参考にした可能性を示す。さらに浄土とは無縁の存在のはずの盲者が日想観を行うことを嘲笑う人々に対し、誰しも等しく弥陀の浄土を想うことができることを主張するために阿那律説話が必要とされ親子再会に加えて「満目青山は心にあり」という悟りも俊徳に与えられた救済であると結論付ける。「見えない者が心眼で見る」先例としての阿那律の故事は、臨模本の俊徳が日想観をめぐる妻とのやりとりの後に自ら日想観を行う根拠というべきもので、その結果、宗教的昂揚感から見えない現実へと引き戻される残酷さがより際立つことになる。当該箇所の改変は〈弱法師〉の主題の変化とも密接に関わっているはずである。小田幸子「『隅田川』子方のことなど」（『鍈仙』639。9月）は〈隅田川〉の「幽冥界を隔てた親子の出会い」のモチーフが同時代およびそれ以降の作品に与えた影響についての論。生者と死者との出会いの場における身体接触表現は逆説的に両者の決定的な隔たりを浮かび上がらせるものであるとし、このようなモチーフの背景に、愛する者の死の事実に向き合って悲歎する人間の姿にリアリティや共感を覚える観客の存在をみる。

鵜澤瑞希「作品研究『光季』」（『国立能楽堂調査研究＝Noh Theatre』8。3月）は、承久の乱で討死にした伊賀判官光季とその子寿王を運命を描いた信光の能〈光季〉を、本説の『承久記』と比較し、本作における子どもの特徴を考察したもの。慈光寺本と流布本『承久記』に基づきながら作られている前場に対して後場では差異が大きく、寿王に〈烏帽子折〉や〈橋弁慶〉の牛若丸のような強烈な暴力性を備えた少年英雄の姿を求めた信光が、寿王の武勇を際立たせるため〈鶴次郎〉を参考に子どもが敵を一人で倒す場面を組み込み、子どもの役者に観客の注目が集まるように工夫したと結論付ける。終曲部で刀をくわえて縁から飛び降り自害する寿王の姿は、確かに『承久記』流布本の贄田三郎の最後を転用したものではあろうが、『北条九代記』巻五「伊賀判官光季討死」は「判官父子ハ今ハ是マデトテ、腹カキ切テ、焔ノ中ニトビ入タリ」と光季親子が共に腹を切り炎の中に飛びこんだと語る。『承久記』諸本の問題を含め、承久の乱をめぐる言説にもう少し目配りする必要があるのではないか。

田口和夫「能〈伯太王〉と間狂言―萬集類・説話・芸能―」（『能と狂言』12。6月）は「白澤王〈伯太王〉の系譜―絵画・説話　付荒平舞―」（『藝能史研究』203。10月）と対をなす論考。散佚曲〈伯太王〉のアイについての記載がある『萬集類』の記載から、〈鵺〉〈巴〉のように本来風流能ではなかった曲が室町中・後期の「風流能の時代」には風流アイを取り入れ風流能的に演じられていたことを明らかにする。多くの能が風流アイによっていわば風流能化することによって生き延びてきたという指摘は傾聴に値する。さらに『上杉本乱曲集』所収の謡い物〈伯太王〉や『三宝絵』にみえる雪山童子説話、玄奘三蔵天竺取経譚、朗詠注や『一乗拾玉集』をはじめとする伯太王説話を確認しながら〈伯太王〉の構成を推測し、伯太王説話の広がりの中で本曲が〈大般若〉とも接点を持ち、芸北神楽「荒平舞」もその流れから発展したものと論ずる。

実技・演出に関する論考を二本。高桑いづみ「返シを謡うということ―［上ゲ歌］形成の一過程とその応用―」（『能と狂言』12。7月）は「返シを謡うということ―小段形成の一手順」（『銕仙』625）の続編。古作の能には［上ゲ歌］を持たないものや七五調定律句の［上ゲ歌］の典型から外れるものが多いが、世阿弥自筆能本においては初句・終句の返シとその節付けがおおよそ定型化する中で、定型の［上ゲ歌］と［クリ歌］の中間に位置する［上ゲ歌］やクリ音を多用する［上ゲ歌］もみられ、世阿弥が曲趣に応じて節を工夫していたことを明らかにする。また、初句と終句の繰り返しで音楽としての形式が整うことに自覚的な世阿弥が、上音で謡い出して謡い返す［上ゲ歌］の形式を［ロンギ］、さらに［中ノリ地］や大ノリ謡などにも応用して歌舞能の構築を目指したと推測する。中司由起子「枕ノ段の型の研究―扇を投げる・衣を被く―」（『能楽研究』38。7月）は〈葵上〉の「枕ノ段」最終句の詞章と型との関係についての考察。「両腕を抜いて脱いだ唐織をすぐに引き上げて被く」という所作を円滑に行

うため右手の扇をどのように扱うかという点から古型付の記述を精査し、衣を被く動きをスムーズに行うための準備動作から御息所の葵上への強い恨み心を表現する型に変化していったと述べる。シテが唐織を「うち乗せ」で被く型は葵上の命を取ることが強調されるのに対し、「隠れゆかうよ」で被く型は「衣を被いている者の姿は見えない」という暗黙の了解に基づき御息所が姿を消すことが強調されており本来的な演出と考えられること、車の作リ物が省略された後、葵上を車に乗せたことを強烈に印象づけるために「うち乗せ」で被く型が考案された可能性を示す。（以上、石井）

本年の『観世』では「観阿弥生誕六百八十年世阿弥生誕六百五十年能の大成者たち」と題した特集が組まれた。2月号の横山太郎「世阿弥時代の舞の身体：白拍子舞と乱拍子のリズム」は、白拍子の物真似舞と乱拍子のリズムの視点から、天女舞以前の大和猿楽本来の舞の様相を考察する。白拍子と乱拍子について先行研究をふまえた上で、白拍子と乱拍子を近似したものとして捉える姿勢が、世阿弥以前まで遡る可能性があると指摘する。さらに世阿弥が白拍子舞を真似ようとした際に念頭に置いたのは、「断続的に和歌を上げ、拍子に合わせて責メを踏む乱拍子的な要素が含まれていた」春日社周辺の白拍子舞の芸態であると推定する。『今様之書』「鼓ウツヘキ様」のリズム表記から、白拍子の責メのリズムを三番叟の揉ノ段に近いリズムと解釈し、そのような短いリズムパターンの反復は即興性・柔軟性があり、場や観客の反応を感じたシテがどのような足拍子をするのかが白拍子舞の責メ、ひいては古い大和猿楽の舞の眼目であったろうとする。白拍子舞の後半に関しては、能の小鼓の長地のようなリズムが持続する中で、「拍子不合の和歌の詠唱と、拍子に当てた舞踊的所作とが交互した」という想定をする。根拠として、小鼓の長地を思わせるリズムが『今様之書』の責メの後半のものとされていること、天女舞成立以前に大和猿楽にとって主要な舞であった白拍子舞、その芸の山場である責メの後半が『別紙口伝』「振リ・風情を拍子に当ててする」という世阿弥の舞の原則から外れるとは考えにくいことをあげる。5月号は大谷節子「世阿弥の文学：ワキの視座から読む修羅の能」。『風姿花伝第二物学条々』修羅で世阿弥のいう「やゝもすれば、鬼の振舞」になる「修羅の狂ひ」は、「名聞利欲の心に支配され、驕慢で闘諍を好み、死後も瞋恚に身を焦がす者たちのふるまい、その心の在りようの表現を指す」であると述べ、そのような修羅道に身を置く人物として『太平記』巻二四「大森彦七が事」に義経と教経の名があがっており、義経は修羅能のシテとして格好の題材（種）であったとする。死後、迷いの中にいる義経の霊に対して、ワキ僧が迷いからの覚醒を促しているにもかかわらず、義経は弓箭の道には迷わずとも修羅の世界にあり続け自らの武勇武功を語っており、「その晴れがましく誇らしげな闘諍の語りこそが、「われとこの身を苦しめる」ものであるという視座が忘れられてはならないとして、〈八島〉の主題は「武士の名誉」ではないと解釈す

る。「義経の霊が幻視する合戦の風景、その生死の海で瞋恚に身を震わせるふるまい、それこそが「やゝもすれば、鬼の振舞」になる「修羅の狂ひ」であり、修羅は世阿弥以前の古能としてあったのではないと指摘し、「その「狂ひ」の振舞に覚醒を促すのが、「八島」におけるワキの視座である」としめくくる。9月号の表きよし「世阿弥の〈頼政〉をめぐって」は、頼政の霊が同じく老武者である〈実盛〉とは異なり自らの奮戦を語らない特徴や、『平家物語』八坂系諸本に頼政が芝の上で自害したとするものがあると指摘する。田原又太郎忠綱の活躍の描写から、〈頼政〉は『平家物語』を要約する形で利用しているとし、『平家物語』を多く引用する〈鵺〉とは対照的な方法がとられている点が興味深いとする。世に出ることなく死んでいった我が身を、埋もれ木に喩えた頼政の辞世の句が〈頼政〉の主題であり、老体と軍体の両方の特性を生かした演技が必要とされる点、自身の奮戦討ち死ではなく敵の若武者の活躍を語らなければならない点など、修羅能として演じるには難しい人物を選択し、他の修羅能とは異なる味わいの作品を目指した、世阿弥の挑戦的な姿勢がうかがえる作品であるとまとめる。10月号の高橋昌明「能「頼政」と史実の源頼政」は源頼政の事蹟について、『平家物語』の記述と『玉葉』等の歴史資料に見える頼政の相違点をあげた論。『平家物語』では頼政が以仁王を説得し謀反を起こす展開であるが、実際は頼政が美福門院といった八条院がらみの人脈からやむなく挙兵したことなどをあげる。武士は鳴弦によって物の怪等から内裏や王家を守護する「武」の呪力が期待されており、そのことが頼政の鵺退治の話に反映しているとする。12月号は山中玲子「能〈江口〉の描くもの」は演出から〈江口〉に見える世阿弥の作意に迫った論。能の約束事に慣れた現代の観客とは異なり、世阿弥時代の観客には舞台上の展開を演技や演出だけでなく言葉で伝える必要があったため、世阿弥作の能は舞台上で演じられることがほとんど詞章になっていると述べる。その上で〈江口〉では江口の遊女が「まことは普賢菩薩の化身」であることを観客に理解させるために、このことを詞章中で何度も繰り返しており、それは「「シテが乱拍子を奏しているうちに菩薩に変ずる」という奇跡の再現」が〈江口〉の演出上の眼目であるからと指摘。〈江口〉の〔序ノ舞〕には長い序が残っており、天女舞は世阿弥が大和猿楽に取り込んで以降、仏法賛嘆としての舞の特色を消し、さまざまな人体の舞う抽象的な舞＝呂中干舞になったとされているが、応永三十年前後には呂中干舞は菩薩の舞としての色合いを残していたという状況を説明する。その上で「遊女即菩薩」という本説を持つ〈江口〉は、独立する白拍子舞の物真似芸に呂中干舞を接続して〔序ノ舞〕の祖型を作り上げる場として最適であったと推定。本説通りに一人の女性が同時に遊女とも菩薩とも見えるという奇跡を表すために、世阿弥は舞の段を遊女の乱拍子の物真似である長い序と、菩薩の舞である呂中干舞をつなぐという工夫を施し、舞後にはシテに遊女として「面白や」と謡わせ、白拍子舞の責メの謡

を真似た謡に続けて結末で再度遊女を普賢菩薩に、川舟を白象に変身させるという工夫したと指摘する。

『観世元章の世界』（6月）にも作品・演出研究が掲載された。井上愛「「大原御幸」をめぐって―その情景描写と「明和の改正」―」は、明和本とそれ以前の謡本の比較から、明和本は女院の鎮魂の役割を示す詞章を省略して「生き延びてしまった母としての姿に焦点」を絞り女院個人の物語へ改訂しているとする。小書「寂光院」については、女院の体験と絶望が語られず、法皇への恨みから切り離された女院が描かれているとし、「寂光院」は小書ではなく替謡として認識されており、「寂光院」の名称は元章以降の可能性が強く、小書として扱われるようになったのは江戸時代後期以降であるとする。作者としては、詞章や舞を大胆に省略する元章の小書の手法を鑑みて「寂光院」の詞章も大幅に削除がなされている点や『明和頃替謡集』の所収曲及び注記から、元章が作曲あるいは作詞に関与した可能性があると指摘する。最後に「寂光院」に安徳天皇の入水が描かれないことについて、当時の尊王思想が影響しており、天皇の入水を語ることに対し憚りがあったのではないかと推測する。柳瀬千穂「舞う宗武を見つめる清親―田安邸関連書付に窺う明和改正前夜―」は、観世清親が田安宗武への能楽指南において記した書付資料から、宗武と清親・元章の交流を読み取り、明和改正の前段階の状況を考察した論。書付資料における宗武が提案した記事から、演出の質を向上させたいという宗武の考えや、宗武が演出家・監修者のような作業を好み、服飾などの故実研究を踏まえた演出の工夫に興味があったこと、宗武の視覚的側面へのこだわりが、明和改正の作リ物の改正にも影響している可能性などを指摘する。宗武の舞った〈忠度〉の記事からは、長大な仕方話のある後場ではなく、宗武の興味が桜の下の人物を悼む前場にあったことが読み取れるとする。型付の「作リ物の桜の木があるように見る心をし、正面を見る」という示し方は、墓標の桜に意識を向ける演技と共に、見る時の心持ちを表す言葉が型付中に必要であると清親と宗武が感じたためであろうとする。また明和改正の影響下にある観世文庫蔵の型付〈忠度〉には「改正ノ形」として、桜の作リ物の使用とそれを用いないときも心持ちは同じことであるという趣向が記されている。宗武の演能を記した清親の書付と「改正ノ形」では共通する所作はなく、直接の影響関係は指摘しにくいが、歌人として桜に寄せる風雅な心の忠度を強調した演出を目指していた点で、宗武と元章の姿勢は一致すると指摘する。次は横山太郎「能の舞を記譜すること―観世元章の型付『秘事之舞』をめぐって―」。一般的な謡舞と器楽舞の型付には、足拍子以外は「一定の長さを持った言葉（音）のフレーズに対して、一定の長さを持った動作のフレーズを対応」させつつも「音と運動の対応に幅をもたせる」という記譜の特徴があり、これは能の舞には繊細かつ厳密な感覚が必要でありながら、記譜の密度が低いということを示しているとし、記述の密度の荒い記譜であることに積極的な意味があると述べ

る。また元章の『秘事之舞』の記譜法の特色を、舞を構造的に把握しようとした記述になっていること、元章に独特の用語定義が見られることをあげ、用語定義からは「所作や足拍子の意味を、舞全体の時間的展開の中での位置において捉えようとした」元章の姿勢がうかがえるとする。注目すべき特色として、「所作と文字（つまり笛の旋律のなかの特定の一音）とが厳密に対応づけられている」点をあげる。それに対し、室町時代の能は舞台空間や技法も流動的であり、江戸時代でも上演機会に応じて舞台空間は一定ではないため歩数が規定される段階になく、現代の稽古でも歩数といった師匠の身体を真似るのではなく、歩行の全体の流れや身体と空間の関係性によって表出する歩幅やピッチの加減、「身体と時間、身体と空間の関係」を真似ることが推奨されていると分析。従来の型付の密度が低いという記譜法の特色は、右のように世阿弥以来、能に「分割不可能な連続的運動の美学」を感じる、能の所作の認識の仕方に根源があると説く。従来の型付は所作の「微細な調整の可能性が記譜のレベルにおいて担保されている」密度の低い特色を有するのに対し、元章の記譜法は型付の密度が高く、それによって「正しさ」を規定する点が大きく異なっているとし、元章のこのような試みを解明するには、江戸城内での技芸伝承の環境、近世家元制度との関係が問題になるとする。深澤希望「「師家」の型、「弟子」の型――『享保十四年清親奥書紺表紙謡本・土蜘蛛』型付書き入れをめぐって――」は、享保十四年清親奥書の謡本〈土蜘蛛〉に記された型付の「師家」・「弟子」と区別された二種類の演出を通して、この型付が元章の型である根拠を指摘し、元章の演出意図に迫った論。演能記録・書上の調査から元章の時代に〈土蜘蛛〉は正式上演曲として定着したものであるとし、それゆえ元章によって演出の検討が加えられた可能性もあるとする。本謡本の型付が元章の型であるとする根拠として以下の三点をあげる。一点目は清宣筆の型付や注釈が記された謡本（観世文庫蔵）から、型付や注釈のみを抜き出してまとめなおした資料の〈土蜘蛛〉に、型付は元章のものと認められるという清宣の記述がある点。二点目は本資料に「寛座」という元章独自の用語が見え、同じ用語が元章手沢明和本の『習十番』〈関寺小町〉（早稲田大学演劇博物館蔵）にあり、「アグラ」と読ませる例があること。三点目として本書の朱筆詞章改訂が明和本に反映されていることをあげる。続いて本書の型付を元章以前・同時代・以後の型付と詳細に比較検討をおこない、結末場面において、弟子の方は下掛リの演技に近く、土蜘蛛と武士の戦いを主軸としていること、巣を投げる「打合働キ」があることをあげ、対して師家の型は直接的な戦いの演技ではなく、「舞働」をも省略する方が相応しいとされ、巣を用いないなど、シテの演技に重点を置いた抽象的・舞踊的所作で土蜘蛛の最期を表現しているとする。このような違いの背景には、元章以前には〈土蜘蛛〉は観世流において稀曲であり、当時大夫が演じる曲ではないという評価が影響しているとし、元章の考案による師家の方は彼の演出能力の高さ

を示すとともに、大夫としての流儀統率力の一端がうかがえるものであると結ぶ。山中玲子「元章時代の小書とその演出意図―小書一覧表・『小書型付』翻刻―」は、元章時代に記録に見える小書の名称と内容を示した小書一覧表と観世文庫蔵『小書型付』の翻刻と考察。一覧表には現行との相違点とともに、元章の演出意図や名称の由来について解説した補注が付く。翻刻された観世文庫蔵『小書型付』は、江戸時代後期の写本ながら、元章に顕著な独自の用字が使用されている点、明和四年に元章が幕府へ提出した目録の写しである鴻山文庫蔵『習事伝授書留』所収「伝授目録」に所載の習事とほぼ重なる習事を掲げている点から元章自身か彼の周辺にいた人物の記述、書写した資料であるとする。習事の要点と演出意図が詳細に記され、特に元章自身が公案した小書については記述が詳しく、元章のそれぞれの小書に込めた思いを忠実に伝える資料であると位置づける。一覧表には小書の内容と一曲のどの部分に関わる小書であるかが示され、『小書型付』の記事にできる限り基づき元章の工夫や意図が分析されており、元章時代の小書の実態を網羅的に把握することができる。

個別の研究も多く発表された。『国立能楽堂』からは三本をあげる。松岡心平「「呉服」に込められた世阿弥のメッセージ」（365。1月）。足利義教の将軍宣下を祝う正長二年五月に笠懸馬場でおこなわれた多武峰様による猿楽で初番に上演された〈呉服〉は、将軍と天皇の代始めを合わせて祝福するための世阿弥の新作曲であると位置づけた上で、〈呉服〉に見える世阿弥の祝意を読み解く。シテとツレの呉織と漢織が応神天皇の御代に中国からやって来たことをふまえ、現在の御代の素晴らしさを讃えるために再来するという設定にしているのは、義教が支える後花園天皇の御代が応神天皇の御代と重ね合わされているためであるとする。石清水八幡宮の神籤により将軍となった義教にとって、その主神である応神天皇に対しては篤い思いがあり、世阿弥はそのような義教の思いを意識して〈呉服〉を作ったと指摘する。さらに〈呉服〉には中国渡来の物品によって日本が豊かになるという国家イメージが込められており、そのような豊かな物社会を目指す義教の姿勢を世阿弥がくみとったからとも考察する。またシテ呉織とツレ漢織を元重と元雅で演じさせることを意図し、両シテの能として天女ノ舞の相舞の構想していた可能性もあげる。井田太郎「幻視させる芭蕉」（368。4月）は、万治・寛文期における謡曲調の談林俳諧の盛隆について、巧妙に謡曲の一節を句に立ち入れる当座性の重視から、単に引用にとどまり笑いに偏るような句の量産への作風の変化を指摘する。そのような変化の中で、言葉を切り詰めて潜ませるように謡曲を句に読み込んでいる芭蕉の姿勢は、談林俳諧の謡曲調とは大きく異なっているとする。『おくのほそ道』には夢幻能を思わせるような「過去を読者に幻視させるような描写が挿入される」特徴を指摘し、それは曲舞集・小謡集ではなく、「謡曲を一曲単位で熟読玩味していた可能性を示す」ものであると述べる。天野文雄「「地獄の曲舞」と曲舞車がある風景―古

形の『百万』の作意―」（373。9月）は国立能楽堂企画公演「能を再発見するV―観阿弥時代の百万」で現行〈百万〉のクセの代わりに、現行〈歌占〉の「地獄の曲舞」を配し、さらに作リ物に曲舞車を出す形での上演に際した論考。先行研究をふまえ、曲舞車に百万が乗って登場し、作リ物が出されていた蓋然性が高いとする。『融通念仏縁起絵巻』には融通念仏の功徳によって地獄に堕ちた者が蘇生する話があり、それは〈百万〉の舞台である清涼寺大念仏の場にふさわしいものであることや、『仏説目連救母経』をもとにしている「地獄の曲舞」の後半が「救母」という点で〈百万〉の母子の離別・再会の展開と重なることをあげて、百万が「地獄の曲舞」を舞う根拠とする。また観阿弥が演じた「嵯峨の大念仏の女曲舞の物まね」は、百万がシテではなく、曲舞舞いではない母が清涼寺大念仏会で子と再会するという内容で「地獄の曲舞」もなかったという定説に対し、曲舞車の作り物が出て「地獄の曲舞」を舞う形が、観阿弥の演じた「嵯峨の大念仏の女物狂の物まね」つまり〈百万〉の原形であるとする。定説に従うと世阿弥が曲舞舞いでない母をシテとした観阿弥の原作に手を入れて、シテを百万にし「地獄の曲舞」を舞わせ、さらにその後に曲舞を現行の曲舞と入れ替えたというような、二度にわたる世阿弥の改編には疑問が残ることと、世阿弥が『風姿花伝』奥義において「嵯峨の大念仏の女物狂の物まね」を「幽玄無上の風体」と回想している部分は、「女物狂」は「女曲舞」と言い換えが可能である点を理由にあげる。同じく世阿弥関連の作品研究としては、大谷節子「世阿弥自筆本「カシワザキ」以前：宗牧独吟連歌注紙背「柏崎」をめぐって」（『国語国文』83―12。12月）がある。新出の柿衞文庫蔵『宗牧独吟連歌注』紙背「柏崎」謡本に世阿弥自筆本「カシワザキ」以前の形が見られることを指摘した論。諸本比較を通して新出謡本は自筆本より後の写本であるが、内容の面においては上掛リ系統の最古本であり、自筆本をも遡る形を有すると分析、また新出本が伝える上掛リ系諸本の古型は自筆本とは異なる祖本を持っており、それは自筆本を遡ると指摘する。自筆本以前の世阿弥本の形は「高僧伝を淵源として出家と恩愛の葛藤の物語から生み出された子を思う故の物狂能」であり、それを世阿弥は恋慕の物狂能へと作り替えることを試み、その模索の過程において自筆本が生まれたとする。稲田秀雄「番外曲「玉鉾」考―古今注との関連・その他」（『同志社国文学』81。11月）は、番外曲〈玉鉾〉の出典と形式・表現・構想に関わる諸問題を考察した論。前シテ女が［クリ・サシ・クセ］で語る、竜宮から秦の王朝に伝わったとする玉鉾の由来と、始皇帝の居場所を指し示すという玉鉾の効用の物語について、能と古今注諸本を比較。玉鉾の由来と始皇帝を探す人物の名が能と重なるものとして『古今和歌集序聞書三流抄』『古今集耕雲聞書』をあげ、能は基本的に『三流抄』系統の古今注を基にしていると指摘する。また前シテ登場段［上ゲ歌］に藤原定家『拾遺愚草』・『新古今和歌集』所収の歌を引用する点、同段［上ゲ歌］に「類ひかな」という「個性

的な禅竹詞」が見える点、後場［ロンギ］にも「いただきまつれや」等、金春禅竹作と指摘される〈逆矛〉などの能に見える表現がある点をあげ、〈玉鉾〉の作者として禅竹の可能性を提起し、禅竹作品の影響下で成立した可能性も述べる。西恵野「女人成仏と太鼓：似我与左衛門国広伝書における「菩薩の能」をめぐる考察」（『フィロカリア』31。3月）は、『永禄十二年奥書国広伝書』の「菩薩の能」と「天人の能」の項目について互いを比較検討し、国広にとって「菩薩の能」は「天人の能」と同じく「天を目指す上向きの心」でありつつ、「殊勝」な心持、「うきやかな精神をあて抑制する心持」で打つものであったと解釈する。飯塚恵理人「幽玄へのいざない」「《経正》試解：琵琶の音と和漢朗詠集の朗詠利用を中心に」（『紫明』34。3月）は、〈経政〉の漢籍の引用が琵琶の音色や管絃講の音楽の優美さを詩的に表現するためにのみなされていると指摘する。同じく飯塚「《三輪》試解：恋の「罪」に迷う神」（『紫明』35。8月）は、三輪明神は「恋をして『杉立てる門』で相手を待っている存在」に描かれており、「神が恋をして心を迷わせたという点のみをこの曲に取り込んだのであり、男神か女神かには言及していない」ため作者の特定はできないが「神秘」について「明確に語らない」という特色があるとする。菊地和博「草木塔「一佛成道観見法界草木国土悉皆成佛」の考察：能・謡曲「鵺」「仏原」「野守」を踏まえながら」（『山形民俗』28。11月）は、山形県置賜地方に集中的に分布する草木供養塔（草木塔）が建立されるようになった思想及びその草木塔に刻まれた偈文に、能の作品や〈鵺・仏原・野守〉等に見える「一仏成道観見法界、草木国土悉皆成仏」の句が影響している可能性を示した論考。

音楽的研究としては以下の論があった。イワン・ルマーネク「能の謡の「平ノリ」―そのルーツはヨーロッパ大陸？―」（『神園』7。5月）は、一五五〇年頃に日本に紹介された『オデュッセイ』が朗唱された機会があったとし、この時に日本人は初めて、ギリシャ古典詩に使われる六歩格（ヘクサメトロス）の量的音律法（「音節の長さの違いでリズムを生成する韻律。一つの長い音節が量において二つの短い音節に等しい」）という韻律を耳にした可能性を指摘し、それが謡のリズムと似ており、「秀吉以前」の謡のリズムからいわゆる「ギリシャ古典」のダクティル（詩の韻脚の一種）をもつ「秀吉以降」のリズムへという移行うながしたと推定する。また「仏教詩の音節韻律」のスタンザ（詩における連）は「定型の平ノリで容易に朗唱」でき、しかも「完全な量的ダクティル韻律」にあてはまるとし、ギリシャ古典詩の量的韻律法と平ノリのリズムの歴史的なつながりを、間に仏教音楽を置いて説明する。三浦裕子「能の「間」―コミをキーワードに音楽的特徴を読み解く」（『紫明』34。3月）は、能の間には、コミという準備の瞬間を重視する音楽的な特徴があることを指摘した論。ツヴィカ・セルペル「能のコトバの抑揚 性差のストラテジー①②／男性のパターン①～③／女性のパターン①②／老人のパターン／あいまいな境界線」（『観世』1月～

9月）は、『早稲田大学演劇博物館紀要　演劇研究』36号に掲載された「能のコトバの抑揚」（『能楽研究』41号「研究展望」で言及）の改訂増補版。

海外・英語と関連する論は二本。新津嗣郎「研究ノート　謡曲『谷行』をめぐって―ウェイリーの英訳、ブレヒトの学校オペラ Der Jasager を通して―」（『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要＝language and culture』57―30、1月）は、〈谷行〉をアーサー・ウェイリーの英訳を参照しながら解釈したうえで、ウェイリーの英訳を基にしたベルトルト・ブレヒト作の Der Jagager を読み解く。「資料紹介「「パゴダ」―ジャネット・チョンによる英語能（二〇〇九年）」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』25。3月）は、リチャード・エマートによる解題と英語台本及び畠由紀による日本語訳。解題には執筆の背景と能として制作された過程が解説される。大島能楽堂とシアター能楽による初演と二〇一一年の再演の公演記録も付す。（以上、中司）

【狂言研究】

近年の狂言研究は資料研究が増加しているが、本年はその傾向が顕著であった。

まず台本の紹介・研究が四本。小林千草「狂言台本の翻刻と考察〈成城本「武悪」の場合〉」（『湘南文学』48。3月）は成城大学図書館蔵『狂言集』所収「武悪」の台本分析。虎寛本・山本東本との詳細な比較により、成城本が両本の中間的性格の本文をもち、幕末に書写されたと推測する。飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵九冊本間狂言「修羅語問」」（『椙山女学園大学研究論集人文科学篇』45。3月）は狂言方和泉流佐藤友彦が所持する大蔵流と目される間狂言台本の紹介（連載）。今回は三冊目修羅能の語リアイの台本の翻刻。狂言研究会「「文久写本狂言集」（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻八」（『あいち国文』8。9月）は連載の八回目。今回は「鬼のまゝ子」から「八句連歌」まで。翻刻者は、山下茜・小谷成子・狩野一三・加藤華・野崎典子。三浦裕子「高楠簫村の狂言〈鷲狩〉」（『能楽資料センター紀要』25。3月）は、明治三十七年（一九〇四）『読売新聞』「日曜附録」に発表された仏教学者・高楠簫村（高楠順次郎）作の狂言「鷲狩」の紹介。本曲は日露戦争開戦時にロンドンへ向かっていた伊予丸船上で、高楠が作り、上演した狂言で、鷲がロシア、龍が中国、鶏が朝鮮、猿が日本のように動物に擬せられた国々やロシアの軍人、合計八役が登場し、開戦時の東アジアの様相を描いた作品。

絵画資料研究は、近年この分野の研究を精力的に進める藤岡道子の論文が三本。「屏風に貼られた狂言の絵図」（『京都聖母女学院短期大学児童教育学科京都聖母女学院短期大学研究紀要』43。3月）は、藤岡が所蔵する「能狂言」屏風の紹介。六曲一双の一隻には三番叟・蟹山伏・熊野・釣狐・箙・居杭、もう一隻には高砂・福の神・張良・入間川・猩々・末広がりの絵が貼られており、三番叟・福の神・入間川などが

作例の少ない貴重な資料であることなどを指摘する。「狂言の絵画資料の収集（その6）「古能狂言之図」の一群を解読する」と「狂言の絵画資料の収集（その7）　京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の望月家絵画資料から」（『東洋哲学研究所紀要』29・30。5月・12月）は連載の6・7回目。前者はこれまで紹介した「狂言古図」と国立能楽堂「古能狂言之図」・早稲田大学演劇博物館蔵「能狂言絵」・『入門奈良絵本』所収「能狂言絵巻」との比較考察で、それぞれ影響関係を推測する。後者は京都の美術家の家系である望月家旧蔵で、めくり状の狂言下絵四十三図の紹介と分析。望月家が師匠の円山派の作品を模写していたこと、四条派の始祖・呉春筆の狂言下絵が存在していたこと、稀曲「歌仙」の演出資料としても貴重であることなどを指摘する。比較的に狭い文化圏の中で狂言絵の書写活動が行われていたという指摘は興味深いが、両論ともこれまでの論文を傍らに置き、何度も比べ直さないと、分析の妥当性が判断しづらい。近く著書としてまとめる予定らしいので、その際は絵図が容易に比較できるように、ご配慮いただきたい。

間狂言台本研究は二本。橋場夕佳「『副言巻』をめぐる諸問題」（『観世元章の世界』。6月）は、明和の改正の一環として製作された間狂言本『副言巻』の刊行について、鷺流と田安宗武との関わりを論じる。鷺流の関与については、水野文庫蔵「鷺流能間」所収「難波」の注記をもとに、『副言巻』の「難波」は宗武の命で新作された語リアイがベースになっていること、「石橋」の来序なしで天狗が登場し立シャベリをする形は、『副言巻』以前の鷺流で創案されたことを考察する。さらに『田藩事実』の鷺仁右衛門が田安家に出入りしていた記述をもとに論じ、『副言巻』が間狂言史で孤立的な位置にはないと指摘する。また宗武の関与について、従来から言われていた文句の改変だけではなく、能の構成・演出に関わる提案も含んでいたことを指摘する。私見では、鷺流の間狂言の台本には、他流とは異なる記事が含まれることが多い。これらの記事が『副言巻』の影響なのか、それとも「難波」のようなケースも多いのか、鷺流の間狂言史を考える上でも興味深い指摘があった。川島朋子「肥前島原松平文庫蔵『間狂言』（一冊）について：京都大学大学院文学研究科図書館蔵『大蔵流惣間語』との関係を中心に」（『女子大国文』154。1月）は文政七年の奥書をもつ大蔵流の間狂言台本の分析。二種ある台本の内、甲本と命名した種と京都大学文学部図書館蔵『大蔵流惣間語』と比較し、大半の曲が類似すること、異同がある曲は省略のある曲と本文自体に異同がある曲に分けられること、虎明本の本文と註から抜粋してそのまま取り入れていること、稀曲にあたる台本が書写過程で省かれている可能性が高いことなどを指摘する。さらに甲本が島原藩士・喜多尾久右衛門所持していた本の写しであることを踏まえ、島原藩士が必要に応じて変則的に書写した本で、実演に則した台本であると位置づける。手堅い資料研究であるが、こうした台本研究が能の受容・享受の歴史や間狂言の研究と

どのように接続するか、という点も重要であろう。

国語学・日本語学分野の論文は三本。村田菜穂子・前川武「狂言の形容詞」(『国際研究論叢』27(2)。1月)は、上代から中世までの日本語形容詞・形容動詞の史的研究とデータベース化の一環として、狂言台本(天正狂言本・虎明本・虎清本・天理本・狂言記)の形容詞を使用頻度を一覧したもの。狂言研究の立場からすると、鷺流の台本も加えてほしかった。また両氏の「狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成」(『国際研究論叢』28(1)。10月)は、狂言の言葉がどのような部分要素に分けることができるか、どのような造語成分から組み立てられているかを上代資料・八代集などとともに一覧化した稿。大倉浩「大蔵虎寛本の「われわれ(我々)」をめぐって」(『筑波日本語研究』19。1月)は、「われわれ」の用例から狂言台本変遷の背景を考える。「われわれ」は狂言台本ではほとんど用いられなかった語であったが、この語は京を中心に武士たちの畏まりの表現として定着すると、十八世紀の大蔵流台本で役柄なども考慮しつつ、「われら」が「われわれ」に変化したと推測する。また、和泉流・鷺流の台本で同様の変化がそれほど見られないのは、大蔵流が「武家と強く結びついた狂言を志向していた」と考える。興味深い指摘であるが、能の詞章や間狂言なども参観すべきだろう。例えば「谷行」では、観世流のみが江戸期になってから「我等」を「我々」に改変している本がある。また、大蔵流だけが武家社会を意識していたかのように読める結論には、疑問が残る。

日本文化との関わりから狂言を論じた論文が二本。大森恵子「瓢と踊念仏」(『国立能楽堂』367。3月)は、瓢と踊念仏の関係を解説する。瓢箪はそれを叩くと水神や火の神を鎮める呪法となると同時に、霊魂の容器となる宗教性を有していたこと、その瓢を踊念仏に用いる例は『一遍上人絵詞伝』に見え、今日も六波羅蜜寺の空也踊念仏などに見えることを説明する。田中文哉「「盆山」とは何か—失われた中世の盆栽」(『国立能楽堂』372。8月)は、諸資料から盆山の姿を考える。奈良絵巻『酒飯論』が盆山の絵が書かれた貴重な資料であること、五山僧から盆山を没収したり、鎌倉公方から富士松が送られるほど、義政が盆山を愛好したことを紹介する。また、庭に忍び込む和泉流は盆山の栽培方法と付合するが、座敷に忍び込む大蔵流は座敷飾りとしての盆石に当たる可能性を指摘する。

実演を踏まえた狂言論が三本。ヒーブル・オンジェイ「心から心へ、翻訳で伝わる笑い—チェコにおける狂言の現状、過去14年をめぐって—」(『能楽研究』38。7月)は、筆者が率いる「なごみ狂言会チェコ」の活動を紹介するとともに、狂言をチェコ語に翻訳する方法とともに、その困難さを記す。オノマトペ・敬語・言葉遊び・演技を伴う謡などをもとに、翻訳が難しい作業における工夫から、今後の活動の展望まで説明している。「武悪」が狂言の本質だという意見は、翻訳を踏まえてこその視点だろう。SALZ Jonah「狂言のドラマツルギー:役者への十三の教え」(『国際文化研究』8。3

月）は「痺」の分析を通して、現代演劇人にとっても有益なドラマツルギーと演出法を汲み取ろうとする試み（英語論文）。謡や発声を伝染性のあるリズム（infectious rhythms）があること、主人の話を太郎冠者が盗み聞きする場面を映画技法の分割画面に譬えるなど、狂言を現代劇の一つとして捉え直そうとする。山田師久「伝統文化狂言の伝承の視点から見た「今の時代にふさわしい学びの環境」（狂言の上演とその伝承）」（『年会論文集』30。1月）は狂言の大和座の修練法と現代の教育問題を結びつけ、「鸚鵡返し」と呼ばれる師匠が口伝えで教える修練法が、人間のコミュニケーションにおいて有益であると示唆する。また同誌には大和座主催の安東伸元が、「柿山伏」のあらすじ・演出・笑いのポイントをまとめた「狂言『柿山伏』（狂言の上演とその伝承）」も掲載されている。

これまで狂言研究の中心であった作品研究・狂言史研究が、近年減少傾向であるのはさみしい感がある。作品研究は二本。村上詠子「中世芸能「狂言」―『天正狂言本』「さひ人」のテキスト本の比較―」（『目白大学短期大学部研究紀要』50。2月）は「八尾」の原曲とされる天正狂言本所収「さひ人」の考察。複数の台本の比較し、それらの語義を辞書で確認するとともに、演出注記に注目し、「地方で生き抜いた鷺流狂言に人間的な心の奥深い部分の面白さを感じる」と解釈する。詳細な調査を行なっているが、全体の論点が不明確である上に、狂言史の理解に誤解が多々あることが残念である。また内容以前に、資料掲載上の最低限のきまりを遵守すべきだろう。作品研究ではないが、登場人物が置かれた窮地などを「恐怖」と捉え、狂言の構造分析を試みる坂場順子「「恐怖」にどう対処するか―狂言の処方箋―」（『神奈川工科大学研究報告A人文社会科学編A』38。3月）についてもここで言及する。狂言を「誰かが誰かに対して、または誰かが何かに対して感じる恐怖」と「状況から醸し出される恐怖」に大別し、さらにそれぞれを細分化した上で、狂言の構造の類型化し、その特質を分析しようとする論。ただし、後者の分類は多くの狂言が該当してしまい、分類にならないのではないだろうか。狂言はある特殊な状況を作りだすことで、劇を構成し、笑いを生みだしていることが多いはずである。また「蝸牛」における山伏の囃子物を「気味が悪い」とし、「状況が観客に与える恐怖」とラベリングする点など、個々の作品の分析にも疑問が残る。狂言史研究は一本。田口和夫「大蔵虎明二題―山桜武悪、虎清・清虎―」（『鋏仙』634。3月）は虎明の事績に関する二つの考察。一つは面作者としての事績で、『わらんべ草』七十七段の記事をもとに、従来否定的な見解もあった面作者としての虎明の存在を確実視する。もう一つは虎明と弟の清虎の関係で、橋本朝生の「いつも一緒にいる影のような存在」という見解に賛同しつつも、山本東次郎家蔵「覚」に込められた何者かへの批判は虎明に向けられたものであると解釈し、従来指摘どおり二人は不仲でもあったと推測する。（伊海）

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○Salz, Jonah, ed. *A History of Japanese Theatre*. Cambridge: Cambridge University Press, 2014。（ジョナ・サルズ編『日本舞台芸術史』）総頁数五百五十頁。

本書は非常に広い意味で捉えた「日本演劇」についての総合的概論であり、神楽や所謂「語り」物語や、日本舞踊などを含む。よってタイトルにはJapanese Theatre（舞台芸術）の語句がある。各セクションの終わりには参考文献一覧がある。以下本書から「伝統芸能」を扱っている部分を中心に取り上げる。

まず、最初のセクション一においては、古代の伎楽、舞楽などから、神楽、声明、延年、おん祭など中世初期にかけての諸分野についての寺内直子による概論がある。次に時田アリソンは、曽我物、曲舞、幸若舞などの語り物について取りあげている。

セクション二においては、加賀谷真子・三浦裕子の、短いながらも良くまとめられた能楽についての主要な事項と室町文化についての論考がある。〈高砂〉〈松風〉〈隅田川〉〈船弁慶〉という代表的四曲の短い紹介がある他、「能と仏教」、「観阿弥・世阿弥」などというテーマを設けて簡単な解説がある。能の歴史は江戸、明治維新、また第二次大戦以降まで押さえられており、更に「能の未来」としてこれからの能の行く末についても言及される。このセクションは盛りだくさんであり、次のような多才なコラム記事が設けられており、多くの専門的な筆者が参加している。アイケ・グロスマンによる「黒川能」、シェリー・フェノ・クイン「世阿弥」「観世寿夫」、バーバラ・ガイルホルン「謡曲と女性」、ディエゴ・ペレッキア「ヴェネツィア・ビエンナーレにおける能の初海外公演」、加賀谷真子・三浦裕子「新作能・復曲」。

セクション三はジョナ・サルズによる詳細な「狂言」の紹介となっている。サルズはこの他「大蔵虎明」「野村家・茂山家」についてのコラムも担当している。

本書では、それぞれのセクションの区切りごとに独立した論があり、能関係としては、モニカ・ベーテの「能狂言の衣装と面」、エリック・C・ラスによる「家元制度」がある。

能についての論考は本書の後半にも頻出する。セクション十二にはローレンス・コミンズによるPremodern playwriting practicesという小論があり、能における世阿弥と後の劇作家の比較を行っている。コミンズはまた、〈道成寺〉の様々なヴァージョンの比較を行っている。セクション十九においては、ウイリアム・リーが、世阿弥、禅竹の能楽論を扱い、セクション二一では、デイビッド・ジョートナーの、西洋における能の受容史概論があり、セクション二三には、編者であるジョナ・サルズによる、Traditional training internationally と題する論において、日本語を母語としない人々へのお稽古の方法などについて述べる。同じくサルズはセクション

二四において、Intercultural theatreと題して能の西洋演劇に対する影響を取り上げている。

本書は演劇広汎にわたる概論書であるので、初学者などには特に有意義な一書であるが、多様なテーマを取り上げるコラムやセクション間に挟まれた論などもあり、多くの専門家の参考となること必須である。

○Tyler, Royall. *Zeami: Six Revived Bangai Plays*.『能楽研究叢書1』、Tokyo: The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hōsei University, 2014.（ロイヤル・タイラー『世阿弥　六つの復曲の番外曲』）総頁九十三頁。

二〇一三年出版の *To Hallow Genji: A Tribute to Noh*（平成二五年「研究展望」参照）収載十八曲のうち、世阿弥作とみなされる六曲〈阿古屋松〉〈布留〉〈箱崎〉〈松浦佐用姫〉〈多田津左衛門〉〈鵜羽〉の解説・翻訳の再録版であるが、あらたに観世文庫蔵・宝山寺蔵の世阿弥自筆本とその校本についての序文が加わっている。

○Emmert, Richard. *The Guide to Noh of the National Noh Theatre: Play Summaries of the Traditional Repertory*. 3（*Komi*）. Tokyo: National Noh Theatre, 2014.（リチャード・エマート著『国立能楽堂の能楽ガイドー現行曲の要約、3巻』）総頁数百四十八頁。

能の構造を解明する細かい英文要約。ＡＢＣ順、〈胡蝶〉より〈六浦〉までの四十一曲を含む。

○Moore, Katrina L. *The Joy of Noh: Embodied Learning and Discipline in Urban Japan*. Albany, NY: SUNY Press, 2014.（カトリーナ・L・モーア著『能の喜び―日本都市部における身体的学習と鍛錬』）総頁数百四十頁。

著者はオーストラリアのニューサウスウェールズ大学所属の人類学者。いわゆる体験人類学的立場からみた能の「お稽古ごと」についての研究。

○Brown, Kendall H., ed. *Traditions Transfigured: The Noh Masks of Bidou Yamaguchi*. Long Beach, CA: University Art Museum, California State University, Long Beach, 2014. Distributed by University of Washington Press.（ケンドール・H・ブラウン編『異形化される伝統―山口毘堂の能面―』）総頁数百頁。

二〇一四年一月二五日より四月十三日までカリフォルニア州立大学ロング・ビーチ校の大学美術館で行われた同名の展覧会の目録、論文集。能楽研究において有益な論として、ピッツバーグ大学名誉教授のJ・トーマス・ライマーによる格調高い「全体演劇としての能」Noh as Total Theaterが収載されている。他には、ウィリアム・T・ヴォルマンによる「能面の幽玄」などがある。

◎論文

○Anno, Mariko, and Judy Halebsky. “Innovation in Nō: Matsui Akira Continues a Tradition of Change. “*Asian Theatre Journal*, Vol. 31, No. 1(2014), pp. 126-152.（安納真理子・ジュディ・ハレブスキー共著「能における革新―伝統の変化を追い続ける松井彬」）総頁数二十七頁。

多くの海外の人々に能を教えている喜多流のシテ方松井彬の活動について、特に新作能と復元曲に対するアプローチについて取り上げている点が興味深い。

○Amano, Fumio. “Zeami’s Poetics as Manifested in ‘Tôru.” Translated by Riyo Namigata. *Comparative Theatre Review*, Vol. 14, No. 1（March, 2014), pp. 3-16.（天野文雄著「〈融〉に現れる世阿弥の能楽論」）総頁数十四頁。

河原の院へのノスタルジーを見るよりも、河原の院を眺めるワキとシテにおける「感応道交」を説く。

○Amano, Sachi. “Japanese performing arts known by missionary priests within the intercultural milieu of the 16th century: Did Fróis encounter Christian Noh?” *Dedica. Revista de Educação e Humanidades*, Issue 5（2014), pp. 123-138.（「十六世紀の異文化の環境下において宣教師らに知られた日本の芸能―フロイスはキリシタン能に出会ったのか」）総頁数十六頁。

多くの日本における芸能について触れ、能やキリシタン演劇についても論じているフロイスではあるが、キリシタン能についての言及を追跡することは出来なかったとする。

○Gardiner, Michael, and Joyce S. Lim. “Chromatopes of Noh: An Analysis of Timbral Progressions in the Introductions to Three Plays.” *Asian Music*, Volume 45, Number 2（Summer/Fall 2014), pp. 84-128.（マイケル・ガーディナー、ジョイス・S・リム「能のクロマトプス―三曲における音色進行の分析」）

〈船弁慶〉〈松風〉「羽衣」の冒頭部分（次第、名乗り笛、一声）の分析をし、「クロマトプス」という造語［クロマ（色）とトポス（空間）のを合成］を用いて、説明する。タイトルにもその造語を使用。

○Hlaváčová, Anna A. “Anchoring the Verbal Image in Noh and Shakespeare Theatre.” Translated by Martin Majzlík. *Slovenské divadlo Special*（2014), pp. 95-100.（アンナ・A・ハラヴァーチョヴァー「謡曲とシェイクスピア劇における言語心像を固定する」）総頁数六頁。

英日劇における劇場空間と周辺空間の比較などについて論じている。

○Kadowaki, Yukie. “Noh Drama and the Samurai.” *Bulletin*

of the Detroit Institute of Arts, vol. 88, no. 1/4（2014）, pp. 104-113.（門脇幸恵「謡曲と武士」）総頁数十頁。

国立能楽堂事業推進課調査資料係主任の門脇幸恵による謡曲の歴史と武士階級との関わりについての論。

○Morita, Yui, Hitomi Oda, and Toshio Morita. “Characteristics of actions for sliding walk technique in Japanese traditional performing art: Pursuit for Rhythm of Jyo-Ha-Kyu,‘introduction, development, and climax’of Hakobi（sliding walk）from proficiency difference in Kyogen actors.” *International Journal of Human Culture Studies*, No. 24（2014）, pp. 204-216.（森田ゆい、小田ひとみ、森田寿郎「日本の伝統芸能に於けるハコビの特徴―　狂言訳者における序破急リズムについての検証」）総頁数十三頁。

タイトルが全てを物語っているが、狂言役者四人のハコビの映像を分析し、その結果「ハコビに序破急のリズム展開を加える難しさは、序から破への速度変化を自然のリズムの規則性に則り体現することにあると示唆できた」とする。

○Nishiwaki, Yasuhiro, Wataru Wakita, and Hiromi T. Tanaka. “Real-time Anisotropic Reflectance Rendering of Noh-Costume with Bonfire Flickering Effect.” *ITE Transactions on Media Technology and Applications*, Vol. 2, No. 3（2014）, pp. 217-224.（西脇靖洋、脇田航、田中裕美「薪能における能装束の異方性反射率のリアルタイム再現」）総頁数八頁。

○Watson, Michael. “Inside and outside the grand lineage: a study of early translations of Japanese nō plays,” *Asia Pacific Translation and Intercultural Studies*（2014）, pp. 28-42.（マイケル・ワトソン「正統派の内と外―初期謡曲翻訳についての考察」）総頁数十五頁。

フェノロサの謡曲翻訳をパウンドが編集した一冊は、欧米における謡曲翻訳の正統派としての位置を確保するまでになった。しかしそこに収載されなかった生原稿しか残されていない曲もある。その中から〈安達原〉〈高砂〉を取り上げる。フェノロサが日本人アシスタントに『謡曲通解』を朗読させ、解説を読ませていることはその日記などからすでに知られている事実であるが、フェノロサの掛詞の翻訳などを証左として内容的な側面からその事実を裏付ける。（ワトソン）